前天津領事官 波多野承五郎
時事新報記者 杉山虎雄 合著

北支那 朝鮮 探撿案内

附朝鮮事件由来

林書房發行

前天津領事官　波多野承五郎
時事新報記者　杉山虎雄　合著

北支那朝鮮探撿案内

附朝鮮事件由来

林書房發行

序

在昔神武天皇東征して都を橿原に奠め大日本國民統一の基礎成れり明治中興の君臣は皇祖の鴻謨を紹述し機に乘して振旅西征版圖を亞細亞大陸に拓き其人民を統一して『新大日本圖』を創むべし是れ我が東洋に於ける文明先導の天職にして二千有餘年來默契冥命せられたる所なり而して今や日清兵を朝

鮮に出し西征の機將に來らんとそ然れども日清修交の條規は尙ほ依然たるなり余豈に此書を公にして我西征の爲めに東道の主人たらんと潜するならんや其目的ハ唯た北支那及朝鮮を探驗せんとそる者の便に供せんとそるに在るのみ然りと雖も探驗者若し此書を行囊に裹み一たび北支那に遊はゝ『新大日本國民』他年の都城、大陸拓土當年の新橿原

は古燕趙の地を措きて他に求むべきなきを發見せん而して滿目の山河悉く愛新覺羅氏の有たるを知らは其憾奈何ぞや支那人曰く惟江上の清風と山間の明月とのみ之を取て禁するなく之を用て竭きず是れ造物者の無盡藏なりと北支那亦た朔北の風あり塞上の月あり探驗者此月に對し此風に嘯かば或は幸に自ら慰むる所あらん明治廿七年七月三

日北京政府の議朝鮮に大兵を出すに決したりとの報に接したる時聊か所懐を卷首に記す

夕鷹舍主人

緒言

本書中支那の部は波多野承五郎君が天津領事奉職中公務の餘暇を以て北清を遍歷し得たる所の見聞を口述し漁夫をして之を筆記せしめ朝野新聞に掲載せし者朝鮮の部及附錄朝鮮問題の由來は漁夫自之を記述し朝鮮の部ハ支那の部と同時に又朝鮮問題の由來は對韓策と題し亦朝野新聞に掲載せし者なり
稿は素と隨て草し隨て掲げたるものにして往々字句の妥當を欠くものあるのみならず特に朝鮮の部に至りては未盡さゝる所多し是漁夫の大に遺憾とする所なれども今や訂正增補の遑なきを奈何せん唯朝鮮問題の由來に就き一二の修正を加へたるのみ

時事新報社樓上に於て

甲午七月

湘南漁夫識

北支那朝鮮探驗案内

波多野承五郎
杉山虎雄　著

支那之部

芝罘

芝罘は我長崎を距ること五百六十六海里馬關を距ること六百八海里更に仁川より航するときは二百七十二海里山東省の東北端に於ける開港場なり此地元と倭寇の來襲を所在の兵營に報ずる爲め狼烟の臺を設けたれば支那人之を烟臺と稱す而して芝罘は烟臺の對岸に於ける一漁村の名なりしが洋人來舶の時誤て之を烟臺の地に附し爾來之を港名となすに至れり地形山を負ひ水に望み港内甚だ狹からず大船

巨艦を繋ぐに足る一朝東洋の風雲動き殺氣支那海に横はるの時は北洋艦隊此港に碇泊し朝鮮の南西を號令することならん然れども山東省の地たる山多く道路の開鑿未だ全たからず内地の各都會との間交通の便少なく貨物の出入亦隨て僅少にして他の諸港の如く貿易の盛大を致すに至らざれば我邦滊船は久しく此處に碇泊せず短きは三時間長きも十時間位にして忽ち解纜するを以て乘客は緩々上陸して市街を見物するの暇なけれども若し船長に聞き合せ見物の餘暇あるときは上陸して港内を散歩するも可なるべし端艇賃は滊船の近岸に碇泊するにも拘はらず割合に高く先づ十錢位を要すべし旅行者は端艇を下り天邊を仰ぎて旭旗の飜へる所を目當てに我帝國領事館に赴き最近の商況などを問合せ然る後居留地を一巡し更に支那市街をも見物すべし居留地の商店は僅に五六家にして住家も亦二三十家に過ぎ

す然れども此の地は勃海に突出せる一大岬にして大河の注ぐなく他の支那諸開港場の如く海水混濁せず港内水常に清く背後山長へに秀づ加ふるに勃海の海風は徐に涼氣を齎し來り最も避暑に適するを以て北支那の洋人は云ふ迄もなく上海香港等の洋人も多くは暑を日本に避けざれば則ち涼を此地に納る故に此地のホテルは我箱根伊香保の温泉宿の如く夏期三ヶ月の收入を以て一歳の生活を立つ其最も大なるものはビーチ、ホテルにして其宿料は一日三弗なり又避暑別墅五六箇所あり皆歐米富商の經營に係るものなり支那市街は居留地に接續したる平坦の地にあり戶數甚だ多からずして衙門寺觀の見るべきものなく道路不潔にして店舗亦た卑陋なり芝罘にては日本貨幣の流通悪しきにより永く此地に滯在せんとする者は豫め爲替を取組むべきあれど芝罘に上陸するは概ね數時間に過ぎず費用を要するべき筈

なれば用意の爲め五六枚の墨其斯格弗と十錢二十錢の日本銀貨一二圓分丈けを所持するを以て足れりとす彼れ此れ市街を散歩する內には發船時間に達すべければ速に歸船し天津に向ふの準備をなすべし」

太沽砲臺

芝罘を出發して凡そ十五時間にして白河の河口に着すべし河口兩岸には夫の有名なる太沽の砲臺あり洋人の砲擊に逢ふと前後三回即ち千八百五十八年五月廿日英國の海軍提督サー、シケール、セイモールの爲に砲擊せられ其の翌千八百五十九年再び英兵の砲擊に遭ひ更に千八百六十年に至り英佛聯合軍の爲めに砲臺を奪はれたるを以て世に顯はる當時は泥土を以て築きたる薄弱なる砲臺なりしが數度の敗衂に懲りセメントを以て之を增築せり支那人の稱道する所によるに堅牢東洋に比なくクルップ、アームストロングの强も亦た拔くべからず

愛新覺羅氏の子孫帝王萬世の業此に依りて以て安く京畿都門の鎖鍵亦た以て固しと旅行者にして若し兵事外交に志ある者ならんには宜しく此に注意すべきなり然れども砲臺の內部は決して外人の見るを許さゝる所なれば熱心者は太沽の南岸に上陸し外部を視察するを以て滿足すべし

白河々口

白河河口を距る數町の所に一大沙灘あり洋人の所謂ターク一、バー是れなり白河より流れ來れる泥土の海潮に逆せられ堆積したるものにして船舶の白河に入るもの必ず先づ之を超へざるを得ず而して春期の干潮に際しては沙上の水僅に二呎に過ぎず滿潮のとき漸く十四呎に達す故に汽船の太沽沙灘を通過するは滿潮のときに於てせせるべからざれば其芝罘を發するや豫じめ時間を見計らひ恰も滿潮の時に

此所に達するを期すれども航行の遲速により時に或は沙灘外に於て潮待をなすを要するとあり又十二三呎以上の喫水ある大船は河口に入ると能はず故に外部碇泊所と云ふ滊船の此所に達するや水先案内者は端艇に乗りて本船に移り河口に入るの水路を指示す然れども沙灘の在所は風潮と河流とによりて殆んど時々刻々に移動すること誠に飛鳥川も啻ならず故に熟練の水先者と雖ども誤つて船を淺瀬に乗り揚げ次回の滿潮を待たざるを得ざるとあり旅行者にして若し斯る船に乗合すれば其時の馬鹿らしさ加減は今更云ふまでもなし眼を擧れば海水茫々白河の濁流を混トて四望鮮ならず沿岸山なく又樹木なく唯だ大沽砲臺の水際に突起するの壯觀を見るのみ然れども此無聊の時を利用して東洋の運命を冥想し日章國旗を此砲臺の下に飜へすの時を沈思せば無限の感慨は政治家の胸に集るともあらん

水路師町

船已に沙灘を超へ砲臺の間を通過して河口に入れば其南岸に太沽の村落あるを見るべし村民の過半は漁蝦を業とし他の一半は支那船舶に需用品賣込を業とす村落を距る凡そ半里砲臺の背後に一簇の洋館あり洋人の小居留地にして航客の所謂パイロット、タウン是なり滊船の水先案內者と天津稅關の出張員白河曳船會社員等之れに住す又船客食糧品等の賣店と旅館とあり旅館をタークー、ホテルと云ふ電報局あり官設に係るものにして明治九年以來開通せり天津までの一音信料銀一弗とす又私立電話會社あり豫約加盟者を募りて太沽天津間に架線せり

船上所見

舷窓を開き試に河岸を望めば寺院及び衙門の瓦屋を見るのみにて他

は皆な一様泥屋なるを認むべし是れ實に我が邦人の北支那に着せし後第一に喫驚するものならん北支那は元と樹木に乏しきを以て家屋を築くに材木を用ひるとなく日乾瓦を疊みて壁となし高粱と云へる蜀黍の殻を束ね之に泥土を塗りて屋根となしたるものなれば遠く之を望めば恰も泥塊の大なるものゝ如く瓦焼きの室の如くカチ〳〵山の狸の船底の如し又た此の泥屋の能く雨露を凌ぐに足るは邦人の怪む所なるべけれど北支那は氣象大に我邦と異なり一年中降雨あるは七八の兩月のみにして他の十ヶ月は殆んど一滴の雨もあることなし且つ蒙古の沙漠より乾燥の空氣を吹き來たり常に濕氣を帶びざるを以て粗造の泥屋も能く風雨を防ぐに足るなり又た太沽砲臺の下に大なる風車の林立するを見るべし是れ海水を引き上げ天日に乾し長蘆鹽と稱する食鹽を製するが爲めなり此の風車に就き旅行者の最も注

意を惹くべきものあるなり他にあらず我邦の實業者は動もすれば支那には食鹽乏しきを以て我邦食鹽を支那に輸入すべしと唱ふれども支那人は廉價の勞力と廉價にして手廣なる土地とを用ひ天日に依り製鹽するが故に我邦の食鹽は價格上支那鹽と競爭し得るや否や疑なき能はず特に又た支那鹽は製造の方法我邦と異なるを以て水分少なく苦鹽を包まず容易に溶解することなきを以て此點よりして考るも亦た競爭し能はざるなり其の支那に於て食鹽の價値の割合に廉ならざるは供給に乏しきにあらずして政府の專賣に屬するが故なり此の事情あるを知らず唯た價格不廉の一點を見て直ちに輸入を試みんと唱ふるが如き其の敗を取ること明かならん旅行者にして商工業に意あらば宜しく製鹽場を一見し大に悟る所あるべきなり

滊船歟鐵道歟

太沽より天津に至る迄の陸路は僅かに十五里のみ然れども白河の河流は屈曲迂回左折右轉するを以て水路三十里と稱す雨後水勢最も盛んなるの時は一時間七ノットの速力を以て流れ水勢遲緩なるときも尚ほ且つ三四ノットの速力を有す滊船の太沽沙灘を過ぎ白河を遡るもの平均七八時間にして天津の居留地なる紫竹林河岸に達するを得べきも夏期水涸れ海潮亦た高からざるときは往々にして船を河中の淺瀬に乘揚げ或は河流の曲處を廻航するに當りて船底を渚上に膠し之を引出す爲め一二時間を費すとなきを期せず又時として淺瀬の爲めに到底天津に航行する能はずして同地を距る二三里の處に於て進行を止め船客を小蒸滊船に移すとあり旅客若し此等の煩を避けんと欲せば滊船の先つ太沽に到れるとき船の事務長に就き白河の水量如何を問ひ若し途中に於て船底の淺瀬に膠するとあるべしとの懸念

ありと聞かば直に端艇を備ふて太沽の對岸なる東沽に上陸し鐵道の便を借りて一直に天津に赴くべし尤も發車度數は我が京濱間の如く頻繁ならざれば此の塲合には時として三四時停車塲に發車を待合すを要するとありと覺悟せざるべからず

鐵道線路

天津東沽間の鐵道は今を去る五年前即ち明治二十二年始て開通せしものにして、延長三十英里東沽より白河の左岸を經て紫竹林佛租界の對岸なる天津停車塲に至る其間唯だ軍糧城と稱する兵營所在の地に停車塲を置くのみ之を除きては途中殆んど皆な荒原平野にして雜草蕪蔓潦水縱橫人をして古昔の武藏野を回想せしむるに足るものあり四際山を見ず又遠林の晩鴉を宿すべきなし地平線上壘々として丘の如きものあるは近鄕の富豪が父母の爲めに築ける墳墓にして疎々た

る楊柳の辛くも數里の行程を點綴して景物の寂寥を破るの役目をなさんとするは是れぞ北支那特有の武藏野なり

白河の兩岸

旅行者にして英語又は支那語に通せざれば停車場にて切符を買ふにも又天津停車場にて人力車を傭ふにも不便なるべきか故に先づ大抵なれば汽船にて天津に到るを良しとす船上見る所の景物は車中望む所と甚だ異ならざれども右岸は天津太沽間の本街道にして數里毎に宿驛村落を見るのみならず其間には北支那名物の桃林もあれば野菜畑もあり河中に支那商船の碇泊するもあれば漁船の往來するもあり例の楊柳も川傍にありては相應に繁茂し彼の壘々たる墳墓的土饅頭も人里に近ければ左まで寂しくは思はれず野に耕やす農夫も道を歩く旅人も小兒も女も馬も牛も野雪隱に用達する北支那男の風采も之

を船上より見るを得べく鷄犬の聲も欸乃の歌もケビンの窓より聽くを得べし唯だ何分にも河水は泥濁りにして百年白河の白きとなく河岸の家屋も屋上屋背皆な泥を以て塗りたれば彼の水天一色のそれならで水屋一色都て泥土なるは些と面白からず然れども此泥土こそ白河を溯る滊船の爲めには都合よきものなりと云ふ屈曲する水路を航行するの際誤つて船を川岸に乘揚ぐるも之が爲めに未だ曾て船底を傷けたるとなし唯だメリ〳〵と泥土の間にメリ込みて藥研形の跡形を殘すのみなり嘗て郵船會社の滊船某丸が誤て河岸の菜畑にメリ込みたるとき人夫を掛けて引出し見たるに跡は船渠形の水溜りとなりて百姓の菜畑は消失したれば會社は菜代と畑代とを賠償したりと聞けり若し泥土の斯くの如く柔かならずして船底を傷むるとき此賠償とを比較せば損得素より日を同ふして語るべからず兎角する内に

船は追々に天津に近づくべければ旅客は身支度を爲さん爲め船室に入るならん支度既に整ひ船室より出て來る頃先づ右舷の方に當りて見ゆるものは濛々として黒煙を吐き出す三四の大煙突を有する製造場あらんこれぞ直隷總督文華殿大學士北洋通商大臣伯爵李鴻章の水陸兩軍に軍機彈藥を供給する製造場東機器局なり船更に進み左舷の方に當りて別に二三の大煙突を見ん是東機器局と姉妹局なる西機器局なり是れよりして船進むと一歩にして天津城の城垣を見るべく各國領事館の旗棹を見るべく外國人居留地の屋根を見るべく終に其家屋を見るべく而して船は早く已に天津を距る五淸里の紫竹林居留地の河岸に着するならん

天津着後の心得

滊船は紫竹林の棧橋に横付けとなるべければ端艇賃を要せず着船の

後先づ第一に心得べきは旅宿を定むることと是れなり天津には旅宿多ければ上等宿屋に泊するも下等宿屋に泊するも自在なり上等宿屋はグローブ、ホテル及びアストル、ハウスの二家にして一泊の宿料銀三弗なり此ホテルの主人は着船の時船の客室に来り名刺を出して案内をなすべければ上等宿屋に宿泊せんと欲するものは手荷物抔都て此主人に始末をなさしむことを得べし是等の旅宿より一層安直なる旅店に泊せんには帝國領事館に就き聞き合すを便なりとす領事館に赴かんには支那人の人力車を雇ふべし又た支那南方の諸港假令上海香港等にては車夫と雖ども居留地に在るものは大抵ピジョン、イングリシと云へる一種の英語を解すれども天津居留地にては日本語は勿論英語と雖ども之を解するの車夫稀なる故支那語にてトンヤン、リンシー、コンクワン(東洋領事公館)と云はざれば通ずることなし領事館までの車

代は凡そ五錢位なれども車夫は概ね狡猾にして土地不案内のものと見れば賃は多額を請求するが故に領事館に拂ひ渡しを依頼するを可とす領事館に着せし後館員に就き何れの旅宿に泊すべきやを問はゞ佛租界の同昌號又は佛照樓を指圖すべし同昌號は所謂買辨即ち船舶に食料を賣込むを以て業とし兼て旅宿を營むものにして洋風の臥床を備く客室の摸樣等一寸ホテル風に擬せり客の望に依りては西洋料理を調へ又た支那料理の注文にも應ずべし宿泊料は一泊七十五錢位佛照樓は支那人の旅店にて掛合次第二十五錢にても宿泊せしむべしと雖ども先づ日本人の旅泊せんには七十五錢位を要すべし

天津居留地

天津居留地は白河の南岸にあり咸豐十年始めて外人の居留を許せり此の地元と紫竹林と云ひ道士の廟を祀りたる處にして荒涼たる一郭

に過ぎざりしが今日は佛英米の三居留地(租界と云ふ)あり外人の居住するもの男女合せて凡そ三百人戸數百戸許りあり其の上流にあるを佛租界となし下流にあるを米租界となし中間にあるを英租界とす帝國領事館は即ち英租界に在りて日本人の居留するものは諸租界に散在せり三四年以前は其の數凡そ五十人に餘りしが當今は僅かに二三十人に過ぎず日本人の家屋は三井物產會社出張所、大坂より出張せる雜貨店武齋號及び寫眞師修髮師外二三軒あるのみ居留地甚だ狹隘なるが故に見るべきもの尠なし唯だ少しく旅行者の目を驚かすものは河岸の倉庫割合に少なく夏日貨物の出入最も多きの時は路傍に貨物を重積し番人を付し僅に道路の中央に人力車を通すべき程の空間を存するに過ぎざること是れなり蓋し降雨多き我國の人士に取りては奇怪の念を生せしむべしと雖ども北支那は一年二ヶ月を除き降雨な

きを以て斯く貨物を路傍に堆積するも怪むに足らず左れば荷主は倉敷の拂ふの失もなく出入に手數を煩はすことも少なきなり天津は冬日寒氣凜烈なる割に夏期暑熱亦た酷ならざるにあらず旅行者終日の流汗を涼風に洗はんとならばヴヰクトリヤ公園に赴くべし翠色將に滴らんとするの邊涼風習々として起り飄々身は異域にあるを忘れ自ら東臺樹畔に逍遙するの想あらん更に金烏遠く地平線上に沈み白河の水徐ろに冷氣を送るの頃共同椅子に倚り洋人の喋々喃々那邊に笑話するを聞くときは又た野毛山上の納涼を思ひ出さしむべし旅行者は天津着の上先づ一日も息ひなば天津城邊の支那市街及び李鴻章伯の衙門兵器製造所等を巡覽すべし右巡覽をなさんには案內者を傭ひ入れざるべからず案內者は言ふまでもなく日本人にて支那語に通ずるものこそ便利あるべければ日本人の家に就き其の傭ひ入れを願む

べし

天津

天津は運河と白河と合流するところにあり而して運河は山東省と經て河南衞輝府に通ト黄河を貫ぬき江蘇省より揚子江を越へ浙江省に至り杭州府に止まる四千餘清里の長流なるを以て古來滊船の便未だ開けざるの時代に於ては南方の貢米其他北京に入るの貨物は皆な支那船に搭じて運河を通航し先づ天津に集合しそれより白河を溯りて北京に運せり又太沽沿岸地方に於て製造する政府專賣の食鹽も白河によりて天津に蓄積し同地の鹽運司衙門より官許の鹽商に渡し此手を經て直隷河南等の各地に輸送するの定めなり且つ近年海運の便開けてより廣東上海等の土貨洋貨を滊船にて積み送るものも亦た此地にて卸し夫より河船にて各地に分運す又漢江近傍にて產出する支那

茶(磚茶共)をも汽船にて上海より天津に送り更に河船にて通州に運し終に露領シベリヤに輸出す其額毎年四五十万捆もある程にて所謂百貨幅湊の地なり故に明の時より衛所を置き京畿咽喉の地を守らしめ天津衛と稱したり人口は未だ詳ならずと雖ども洋人は稱して九十万と云ひ我が陸軍士官は三十万に過ぎずと云ふ後者蓋し其の實を得たるものならん乎天津の周圍に牆壁あり咸豐九年長髪賊の亂あり親王僧格林沁天津を守りて築く所に係る天津城を距る近きは十八町遠きは三十町長さ六里高さ二丈營門十一箇ありて天津城の外廓をなす廓内の支那人は所謂五方雜處にして廣東人もあれば山西人もあり湖南人もありて風俗浮薄なりと稱せらる天津元と固有の物產なし人民は皆な取次業に從事す

李鴻章伯の兵器製造所

李鴻章伯は天津及び天津近傍に二個の兵器製造所を有せり一を東機器局と云ひ一を西機器局と云ふ東機器局は租界を去る北一里平地に在りて繞らすに土壘を以てし方二十町餘局内銃器彈藥を製造す就中火藥の製造最も盛なり工場に鐵道を敷き鐵材工夫等を運搬す中に圖算學堂、水師學堂、管輪學堂等を設く各堂生徒六十名宛あり西機器局は居留地を去る西十町許り規模稍東機器局より小あり兵器製造所を見んと欲するものは領事館に照會を求むるか或は出入商人に随ひて入局すべしと雖も前者に依るときは手數多きを以て後者を採ること却て便宜なるべし

支那人街

天津の支那人街は他の支那人街と同じく不潔を極め特に夏日は臭氣紛々土地馴れざる神經質の旅行者は殆んど堪へざらんとする有樣な

れども支那に遊びて支那人街を見ざれば事遊ばざるに如かざるべければ責めては重もある市街だけ是非とも一覧して見聞を博ふすべし但し案内者を伴はざれば万事不都合ありとす支那人街は居留地を距る半里天津城の内外にあり方今城内は大に衰へ商業繁榮ならず城外即ち白河沿岸の沽衣街鍋店街等の諸街は漕運の便あると居留地に近接するとにより繁榮却て城内の諸街を凌駕す支那人街には天津名物の土人形あり細工は左迄に精巧ならざれども本國への土產としては頗る適當なるべし代價は中形丈け五寸許のもの一個五十錢あり又絨氈あり天津の名產なり我が日本風の坐敷に用ふべし摸樣は支那固有のものなれども注文によりては大抵の摸樣を織出すべし價ば一尺平方に付き二十錢より五十錢までとす又保定府にて製する毛氈を賣る家あり蒙古の毛皮類を賣る家あり此等は土產物には面白かるべし就

て見るべし

天津の物産及び貿易

天津は白河沿岸の濕地にして近傍に水沼多く從て疏水の便なく又隨て灌漑の利なければ耕地の過半は高粱と稱する一種の蜀黍を植ゆるのみなり故に中人以上の常食なる米は之を南方に仰ぎ中人の常食なる小麥は之を保定府近傍に求む獨り桃實葡萄梨林檎等の菓實と白菜とは天津の名産と稱すれども之を上海香港等に輸出するは金高に積りて纔に僅々たるのみ然れども天津の産物にあらずして天津を經て輸出するものあり即ち蒙古産の羊毛駱駝毛毛皮類と保定府近傍に産する麥藁眞田紐等とす而して羊毛は嘗て本邦に於ける羅紗製造の原料となさんため之れを買求めたることありしが遂に收支相償はずして止みたり惟ふに買入の手續其の當を得ざりしに由るなるべし現に

洋人は盛に之れが輸出をなし莫大の利益を占ることありと云へば手續次第に依りては我邦に輸入して不利なるべき筈なし此の邊は實業心ある旅行者の大に注意すべき事共なり輸入品の重なるものは先づ金巾砂糖石油なれども前述の如く天津近傍に物産なきを以て我邦より輸出を試みんには飯米は勿論竹箒桶板薪炭等の日用品に至るまで若し和船又は運賃低廉なる帆船にて之を送らば販路に乏しきの憂なし然れども現行の制規によるに和船又は假免状を有する船長の指揮に係る帆船は外國航海の文字に制せられて朝鮮までは航し得るも同地より一葦の帶水を隔てたる北支那に至ることを得ずして遂に此等輸出の道を開く能はざるは遺憾の至りならずや

山西會館

是より旅行者の一覽すべきものを記さんに天津城内に山西人の倶樂

部あり山西會館と名づく天津會館中の最美なるものにして山西商人の相結びて建設せるものなり館內テーブルにて二三百人の會食をなし得べし若し之を演設場に充てなば數千人を容らるゝことを得中央に舞臺を設け劇を演ずるの用に供す構造は支那風なれども惜氣もなく金銀を鏤め精巧の彫刻を四壁に飾りたるは旅行者の目を眩せしむるに足る館內を一覽せんと欲せば案內者をして番人に二十五錢位を與へしむべし

中堂衙門

支那人街より浮橋を渡れば李鴻章伯の衙門あり總督衙門と稱す又た俗に中堂衙門とも云ふ總督の役所にして李伯の官邸を兼ぬるものなり衙門の前に木戸あり常に開放す中に赤色と碧色にて塗りたる木彫の獅子一對あり高さ五尺許り其中に大門あり亦た常に開放す又其內

に赤門あり來客のときにあらざれば之を開かず家人僮僕屬僚の類は門側の小門より出入す其形寺院の仁王門に似て製作は隨分精巧ならざる方なり一對の門扉に各々人物畫像を描く彩色は胡粉と紅殼とを用ひ畫法は紙鳶畫風なり其一の畫像は面貌を白く塗りて笏を手にし他の一は赤く塗りて書冊を携ふ支那人は云ふ此人物は神荼鬱壘と稱し門神の像なりと李伯の客廳後堂に達するには此門の外猶は一門あれども此より內は外人の入るを許さゞる所なり邸宅の周圍は煉瓦の高牆を繞らし要愼頗る堅固にして牆內層樓の聳ゆるなく高樹老木の鬱葱なるは勿論柳一本ヒバ一枝も牆外より見ゆるなく邸內一面に瓦屋根にて埋もれたる樣子は何分にも陰氣にして何處やら牢屋めけたる所あり之を我國大臣官舍の高樓空に聳へ高樹屋を繞り噴水の響淙湲として清く花笑ひ鳥歌ひ月白く風冷かなるに比するに素より日を

同して論ずべからざるなり旅行者之を見て實に是れ世界第一の大帝國に最も勢力ある文華殿大學士直隷總督北洋通商大臣民部尚書兼都察院右都御史直隷等處地方兼管河道提督軍務糧餉紫荊密雲等關管巡撫事伯爵李鴻章氏の邸宅なるを知らば無量の感胸裏に湧起せん

三岔河口

三岔河口は白河と運河と合流する處なり北京に上るの舟楫皆な此處に幅湊し全流貨物を以て充積し河水を見ること稀あり而して碇泊取締規則なるものなきに依り中流船を通ずるの餘地だに剩さず聞く嘗て故鹽田公使の舟に乘ドて河口を上らんとする際舟楫に遮られ到底通過することを能はざるより俄に急使を衙門に馳せ其の由を告げたるに胥吏來りて六間餘の鞭を以て船夫を毆ちたれば船夫之に避易し少しく通路を開きたるにより辛ふじて通船することを得たりと云ふ放

任主義の濫是に至りて極まれりと云ふべし

佛國天主教堂

河口に雲を衝くの高塔あり是れ即ち佛國天主教堂の舊趾なり千八百七十年六月廿一日の事なりき支那暴徒は天主教堂の僧小見を殺せりとの訛言を信ト猜疑的攘夷心を起し襲ふて佛人十九名を教堂内に虐殺せる所なり爾後此堂を閉鎖し別に佛租界中に一堂を起したりと雖ども今尙は紀念の爲め之を取崩すに至らず

鹽沱

三岔河口下流の左岸に鹽沱あり即ち直隷山東河南に供給する長蘆鹽を畜積する處なり遠く之れを観れば雪山の如し降雨の季はアンペラにて之を掩ふのみ蓋し多少雨露の浸潤することあるも我邦の食鹽の如く容易に溶解することなきに因るならん傍に長蘆運司衙所あり以

て鹽沱を守り又た此の鹽を管理す旅行者は衙所に就き鹽沱に入り親しく長蘆鹽の性質を考究すべし

海光寺

海光寺は宏大なる寺院にあらずと雖とも洋人は之れをEldin's templeと稱し其の名を知らざるものなし嘗てエルヂン卿の英清條約を結びたる處なり故に此の名あり

馬車及び騾轎

天津より北京に至る水陸二路あり陸路は凡そ三十里にして行程二日を費す水路に至りては河水の深淺と風力の有無とにより或は三日にして着するとあり或は五日を要するとあり陸行者は一輛の馬車と一名の支那從者を傭ふべし車の傭賃は時節によりて相場に高低あれども大抵銀五六弗にして從者の給金は三四弗なり此馬車は明治十八年

伊藤大使の一行北京に至りたるとき或る新聞記者が大八馬車と命名したるものにて我大八車の如き丈夫なる車に蒲鉾形の幌を取付け二頭の騾又は馬にて之を曳き客は幌の中央に踞坐し馭者は其前面に腰を掛け車輪と馬の後足の間に我が足をブラ下げ從者は同じく其右に腰を掛け都合三人乘の馬車なるが道路の粗惡なるに加へてバチなしの車なれば車の一動馬の一歩毎に乘客は頭を幌に打ち付け臂を擦りむき手玉の如くに飛び揚り不倒翁の如くに倒れんとして僅に起き揺られ又撼られ終に堪忍なり難く車を棄て歩行を試むるも路已に粗惡なれば歩に倦みて復た車に踞す斯の如きは車を備ふて北支那の内地を旅行する外國人の得て免かるべからざる事なれども車に乘り慣れたる支那人は車上に安坐して煙草を喫し書を讀み或は鞠々として眠り殆んど何等の苦痛を感ぜざるが如し或は馬又は驢馬に乘れば此等

の不愉快を免かるゝを得べけれども旅行者は夜具蒲團と多少の食物とを携へ夏期なれば蚊帳をも持參せざるべからざるが故に此場合には別に車を傭ひ支那從者を乘せ更に馬夫を傭ひ之にも馬又は驢馬を給せさるべからざれば無益の費用を要すると尠からず別に騾轎なるものあり二頭の騾に御輿樣の轎を付けたるものなり之を傭ふには北京まで十四五弗を要す轎の柄細くして程能く撓むべく騾亦た歩するに巧なれば轎中の人殆んと動搖を感せず之に乘るは最も安樂なる旅行なり然れども外人の北京に往來するもの病人か高貴の婦人にあらされば乘らず

天津を發する日

天津より北京に至る里程僅に三十里なり二頭曳の馬車に乘り從者一名と馭者一名とを合して三人の乘合なり若し道路の有樣我國の如く

ならんには一日にして容易に達すべき筈なるに此間の道路は我國にて意味する如きものにあらず原野と畑地とを問はず成るべく凸凹の少なき成るへく水溜りのあらさる成るべく迂廻せざる所を選み此方角を行けば北京に着すべしと思ふ所に一車を驅りて車轍を殘し二車三車前轍を履みて同じ處を通行し曾て人工を加へずして泥土の中終ひに自ら道路類似の蹊を開き今日の車轍は昨日の車轍より深く去年の馬蹄は今年の霖雨に逢ふて已に魚を住ましむるの有樣なれば雨後泥濘の折抔には二日の行程は隨分困難なるのみならず北京の城門は日暮に閉鎖するの規則なれば其以前に着せんには先天津を午前三時頃に出立すべし天津を出立する前馬車の備方と從者の備方とは宿店に命るも可なれ共居留日本人に依賴する方便利成べし食物は麪包及び鑵詰類ジャム、バター醬油等を携ふを以て足る皿鉢ナイフ、フオルク

を携ふるは贅澤と知べし夜具は時候次第にて用意せねば協はず又途中の費用として三四弗の銀貨を支那銅錢に換へ豫め從者に渡すべし凡そ此等の携帶品の始末は支那從者に任せ置けば何事も不都合なし平常不器用なる支那人が此始末に巧みなるは彼等が祖先以來此種の旅行に慣れたる故ならんか天津を出立して晝頃には揚村と云ふ驛に着し日本人の眼より見れば馬方宿とも見ゆる旅店にて午飯を喫し再び車を急がすれば暮方には河西務と云ふ所に着すべし此所には白河を上下する船舶より船税を收むる爲め北京の工部衙門の出張所ありて北京道中重要の地なれども亦た實に一貧驛たるを免かれず

旅店

旅店は二三軒あり何れも支那宿屋なれば旅行者の眼には頗る珍しかるべし日本にて大坂神戸名古屋は申す迄もなく東海道筋杯の上等宿

屋に宿すれば眠食共に何等の不便を感せず旅愁抔とは唐人の寢言と思ふべけれども此宿屋に一泊すれば唐人もマンザラ嘘言を吐かざるを發明すべし支那宿屋には大抵長屋門の如きものありて入れば中央に方形の廣庭あり一方には十五六疋の馬を繫ぐに足る廐ありて他の一方には六疊敷位の小部屋を連ね建てたる長屋あり正面即ち門より眞つ直に突當りたる所に正廳を置き上等の客人を宿せしむ正廳は十二疊敷位にて其の三分の一だけは炕なり炕とは煉瓦にて土床より凡そ二尺計り高く積み上げ其中に火道を通し暖を取るの工夫をなし上面は泥を以て塗り蘆蓆を敷きたる一種の臥床なり他の部分は土間にて方形の支那テーブルと支那椅子二三脚を置く元來支那人は座敷の掃除に注意せざる性質にて潔癖家皆無の國柄なれば炕の上も椅子テーブルの上も壁も天上も塵だらけにて其上に北京上下の儒生殿が御

流義の悪詩を壁に落書し其所らあたりに糞を覆したる跡もあれば種油に汚れたる所もあり入口の障子は支那紙にて張りたれば微風も猶之を破り冬期は寒風衾を冒し旅夢暖かなると能はざる代りに三伏の候は臥して窓外の涼風を容るゝの便あり尚ほ其上に掛物一軸花瓶一個もあらばこそ其有様は宛然我國の空家に同じく之に宿する旅行者は古の武者修行者が行き暮れて山間の辻堂に一夜の夢を結ぶが如し或る意味に於ては隨分面白かるべし

支那にては古より南船北馬の語ありて南人は揚子江の長流と運河の水運と所在の大湖とにより何れに行くも船に乗るもの多く北人は馬に騎して曠原平野を乗り廻るを常とし馬騾馬及び驢馬を使用すると多し去れば此旅店の一方に廐を設け旅客の來着するを見れば客の世話をするよりは馬の始末をなすを第一とし鞍を卸し草料を切り黒豆

を洗ひ水を汲み丁稚も小僧も主人も番頭も都て皆な馬の爲めに奔走す其れ既に馬を以て第一の御客樣とし馬を宿せしむると多きが故に正廳前面の廣庭に馬糞の堆きは云ふまでもなく此所彼所に馬の寐藁の散亂しあるは怪む迄もなし

サテ旅行者は此等の光景を視察し次に便所を捜すべし大抵の宿屋には廐と正廳との間なる庭の隅に高粱の莖にて圍み屋根もなければ戸もなき所あるべしこれぞ支那人の厠なり其中は一面の土間に壺もなければ桶もなし毎日若くは隔日に掃除して排泄物の取片付をなし後に灰を撒布し置けば我國の宿屋の便所の如くに臭氣甚しからず昔漢の劉邦は鴻門の會に厠より逃出したりと聞く我國の雪隠より逃出さんには窓を破るか壁を毀つか兎に角容易の事にあらされども鴻門の厠も此種の構造なりしなるべしと思はるれば劉邦の之れより逃出し

たるも別に不思議の事ならざるを發明すべし
兎角する內支那從者は豫て天津より携帶し來りたる鑵詰類を調理し正廳の支那テーブルの上に安排し例の炕の上に臥具を敷くべければ食後は武者修行者の心得か陸軍の野營に附合ふたる積りにて寢に就くべし凡そ支那宿屋には浴堂なく旅行者若し浴癖あれば盥に湯を買ひ手足を洗ふ位にて滿足せざるべからず翌朝は午前三時頃に宿屋を出で碼頭驛にて壹食をなし日暮前に北京に着するは容易なるべし

景色異なる所

此日見る所の景色は天津近傍の景色と稍や趣を殊にし楡樹の林を見るべく時としては松ヒバの類をも見るべし特に眼を驚かすは北京廓外の墓地なり古より支那人は墳墓を重んするの慣習にて中世以後風水の說汎く民間に浸染したれば通常人と雖ども墓地には金を惜まざ

るに流石北京は帝都の地なれば平民にして壯大なる墓地を有するもの多く北京の宗室又は旗人の身分あるもの丶墓地は廣さ一町計りもあらんと思はる丶地に瓦牆を繞らし瓦門を設け其中に松柏(我國のとゝなり)の類を規則正しく植付け中央に例の土饅頭を築き其前に大理石の石碑を建て一隅に小家を置き墓守りを住はしむ是れより以下のものと雖ども大抵松柏の類を植付けざるはなければ廓外一帶の地一種の公園の如き觀あり聞く蜀の成都なる孔明廟前の大柏古梢愛すべきが故に杜子美之れが爲めに古柏行を作り柯如靑銅根如石と吟せりと旅行者若し閑暇の時を得て廓外滿野の墓地を徘徊せば孔明廟前の大柏の如き古梢愛すべきの老柏を見出すこともあるべし

張家灣

碼頭驛に晝食を喫し行くこと數里ならず岡に據り川に面し繞らすに瓦

牆を以てしたる小城廓の前面に屹立するを見ん是れなん天津より京に入る陸路を扼するが爲め設けたる北京廓外の要塞張家灣なり長髪賊の亂後政府困弊して城垣を修めずと雖も瓦牆の高さ凡そ二丈餘城門巍然として空に聳へ石造の眼鏡橋あり溝に架す亦た壯觀たるを失はず城内人家稠密商店あり旅店あり酒樓あり衙門あり蓋し小市邑なり

北京近傍の高原

旅行者已に張家灣を過ぎ坂路を登り四顧すれば茫々たる一面の高原あるを見ん原中畑地あり村落あり松林あり楡林あり墓地を見るべく寺觀を見るべし靄然として丘嶽の西に聳ゆるものは所謂西山にして雲煙模糊の間に山影を北に認むるは愛親覺羅氏皇帝の温泉塲なる湯山一帶の山脈とす通州八里橋の瓦塔は高く地平線上に突出して道行

く人に路標たらんとするが如く張家灣の城市實に之を眼下に見降し寸人尺馬豆犬砂雛蠢々然として其十字街頭に集散離合するを見るべく遙に眸を決して東天を一望すれば肉眼の及ぶ限り地平線の盡くる所雲漠々水渺々曠原千里際涯なきを見ん蓋し此高原は西、西山より東、張家灣に至る凡そ十里にして北、湯山より南、蘆溝に至る亦た凡そ十里なり地自ら東北に傾きて天然疏水の利を有し玉泉山より流出する玉河の清流は此高原を貫通して東白河に注ぎ灌漑の便亦自ら備はる水清く氣秀で土地沃燥にして誠に帝王の大都を置くべきの地なり故に遼の幽都と金の大興と皆此高原に工を起し蒙古の英雄忽必烈亦た此高原を相して元の爲めに大都を開き之を燕京と稱し朱明の成祖も地を此に卜して北京を置く明亡ぶるの後大淸亦之に都す此高原、此好高原豈に啻に帝王の大都ありしのみならんや冀北の良馬も嘗て此高原

の草に秣ひ漁陽の鼙鼓も昔し此高原の地を動かし燕の昭王黄金臺を築き天下の名士を延きたるも此高原にして西野來島の家元なる壯士が風蕭々の吟をなし燕趙の若殿原が持前の悲歌を呻り出したるも亦た此高原なるが如し秦相蔡澤は此高原に産聲を揚げ元將耶律楚材此高原に書を講じ天晴れ天下の名將となれり文天祥の節に死し莊烈の難に崩じ李自成の暴を逞ふし徐達の功を擧ぐ皆な嘗て此高原に於てせり旅行者若し坂上に大八馬車を停めて此等の感想を胸中に浮べ來らば一片の壯心自ら勃々として抑ゆべからざるに至らん

北京着

張家灣より二里半にして韋家園と云ふ小驛あり此驛を過ぐれば例の墳墓は其數益々多く其搆造愈々壯なるを見るべし又行くと二里許りにして北京外城の東門なる東華門に達す門を入り右折し行くと十數

町にして內城の東南門なる崇文門を入り直に左折し行くこと數町にして交民巷即ち洋人の所謂レゲーション、ストリートに着す各國の公使館及ホテルは皆此市街にあり上等ホテルは洋人タリウ氏の開く所にして支那人之れを亨達利と呼ぶ一泊の宿料銀三弗なり別に支那人李氏の宿屋あり俗に大李飯店と云ふ天津の同昌號旅店と大抵同一の格にて宿賃も七十五錢より一圓五十錢位なりとす

天津北京間の水路

前にも記せし如く天津より北京に行くに水路を取るときは風模樣により舟行遲々時に五日位を費すことあるべきを以て成るべく水路を取らざるを便利とすれども時日を惜まず陸路に困しみ若くは婦人を携ふる人々は已むなく舟路を採るべきなり依りて今簡畧に航河の準備及び途上の摸樣を記さんに白河を遡る舟船は形我屋形船に似て長

さ六間許りに中部二間半乃至三間計りに屋根を掩ひ之れを室となし室を三部に分ちて前部に支那風の椅子及び卓子等を置きて客室に充て中部を以て其の寝室とし後部を以て從者の寝室とせり船體の構造頗る不器用なれども亦た以て乘客五六人を容るゝに足る船賃は時に依り高低あると勿論なれども先づ六七弗と心得なば差したる不足なかるべし舟行に要する食器食物の用意は陸行と異なることなけれども特に注意すべきは白河の水混濁して飲料に充つべからざるが故に豫め六七日分の清水を蓄ふべきこと是れなり尤も支那人は此の濁水を掬して之れに明礬を加え混濁物を沈澱せしめ舟夫の如き或は泥水の儘にて飲むもあれども風土に慣れぬ本邦人には飲用せらるべくもあらざるなり又數日平野間の濁流を遡るは隨分退屈なれば天津より酒、菓子、小説、愛讀の書若くは其他消閑の具を携へ豫

め舟中の無聊を散ずるの用意をなすべく或は匆々の際此れ等諸般の用意を遺忘することも多かるべければ北京旅行に事慣れたる日本人を傭ふて之れに依頼すること最も便利なるべし天津には素と日本人少なきが故に在留人にして適々日本人を見るときは何となく故人に遇ひし心を起し同情相憐み易きものと見え万事懇切に斡旋する親切者少からざれば已に其の依頼を受くるときは自ら進んで旅行の注意をなしボーイ傭入等をもなし呉るゝなり扨て紫竹林に纜を解きて三岔河口船舶輻輳の間彼處此處の船舷に棹を突き當て辛くも白河の上流に出で若し幸にして順風の便を得ば僅かに二日半にて通州に着すべし支那船の帆は八寸乃至一尺を距て桁を付したるものにて風受よく揚げ卸しにも不便を感ずることなし左れど逆風に遇ふか或は風全くなきときは途中三人の人夫を傭ひ曳船をなすことなれば進行甚だ

遲く往々五六日を費し猶は達せざることもあるなり

舟上所見

河岸は皆軟土にして砂礫なきが故に河水氾濫する毎に激流此岸を洗ひ去り他岸に沙灘を作り沙灘又た變じて岸を築く等凡そ洪水毎に河身必ず變轉し昨日の淵は今日の瀬といひけん語は此白河の爲めに造りしものかと疑はるゝ許りなり左れば其の屈曲夭嬌なる見慣れざる旅客の眼を驚かすに足るものあり河身常にS字狀をなし蛇の蜒蜿するが如く又た羊腸を地に拋ちたるに似たり尤も屈曲甚しくして舟行に不便なる代りに亦た旅行者に便利なることあり旅行者舟中に坐し眼を兩岸に放てば滿目山岳なく平野際涯なく河水混沌恰も膠を溶したるが如く船輕く揚らずして千里一樣風景に變化なく旅情を慰むるものの一も之れなきに當りて河岸の青草蔓々たるの間に獵犬の狺々たる

を聞くべし是れ旅客の船行に倦みて岸に上りて銃獵を試むるなり旅行者若し獵銃を携へなば先の旅客を學び上陸銃獵を試むるも可ならん又た河岸に散歩をなすも惡しからず左りとて船はS字形の河流を迂回するが故に決して相失するの憂ひなし唯高さ七尺餘の高粱畠の間に迷ひ込み出路を失はざる樣に注意すれば足れり半途に至る比東北に當り雲烟糢糊の間に山岳の突如たるを見る是れ實に太沽河口に入りてより始めて見るを得べき山影なりとす蓋し數日の間平野の間を跋渉せし旅行者の眼には馬頭初めて米嚢花を見るの想あるべし是れより二三日を閲し遙に層塔の高く空際に聳立するを望まん是れ通州の八角塔なり船進むに從ひ高塔彌々高きを加へ愈々高きを加ふるに從ひ船舶の益々多きを見る即ち通州に着するの合圖なりと知るべし

通州

通州は北京天津間航路の極まる處なるを以て天津よりの客船荷船皆此處に輻輳す碇泊船舶の多き三岔河口に讓づらす河岸に埠頭あり泥土を以て築きたるものなれども河流遲緩なるが故に潰崩の虞なし此地一小都會をなすを以て他の支那都會の如く周圍に煉瓦の牆壁あり市街清潔ならざるは記す迄もなく見るべきもの亦た少なし旅行者の土産話ともなるべきは唯だ一の八角塔あるのみ高さ凡三十五間許り支那瓦を積み上げたるものにて八面に各々佛像を彫刻す其の形ち我五重塔の八角にて軒の長く突出せざるものなり搆造左迄に壯麗なりと云ふにあらず又た左迄緣起あるものにもあらざる如くなれども支那人中には頗る有名なり河岸に北京貢米を入るゝ倉庫數十棟あり

運糧河

は荷物を車に積み車に從ひブラ〳〵徒歩すべし但し車を雇はゞ一圓五十錢位なれども荷車のみなれば六七十錢なり途上且つ驚き且つ笑ふべきは北京通州間の石路なり巾二間半許にして長さ三尺巾二尺五寸厚さ二尺許の花岡石を一直線に敷きたるものにて初め北京貢米を運搬する爲め明の永樂年間の築造に係り其の後多少の修繕を加へたるには相違なきも清朝の末路に至りて絶て修繕せざりしと見え大石處々に散出し馬車の往來を妨害す此處を通行するものは恰も石材會社の物揚場に車馬を驅るの思あるべし北京に近つくに從ひ土饅頭を見ると前既に記したるが如し漸く北京に近づけば城門外に日壇の高く突起するを見る是れ皇帝の日を祭る處とす日壇を左にし行くこと數町朝陽門に達す門を入りて三十町交民巷に着す

北京の地勢

北京近傍の高原は禹貢冀州の域にして陶唐に幽都と云ひ虞周に幽州と云へり范鎭の幽州を賦するや縄直砥平形勝爽塏なりと云ひ木華黎の幽燕を傳するや虎踞龍盤形勢雄偉なりと云へり今ま其地形を考ふるに太行の山脈西よりして來り演迤して而して北す宣化昌平の諸地に至り東に迂回して終に山海關に達す南は則ち渤海の水黄河の流あり而して之に界す此間の平原曠野に流るゝ所の河川は一を白河と云ひ遙に源を蒙古の喇嘛廟近傍の高原に發し雲中を經て南通州城に達す二を玉河と云ひ北京の西十數里なる西山より出で大内を經て北京城外の通惠河に注ぎ白河に合流す三を渾河と云ひ北京の西南三里の地を流れ宛平の界に入る皆な漕運を便にし灌漑を利するものなり古來支那人が此地の形勝天下に冠絶し誠に天賦の國なりと稱せるは蓋し之が爲めなるべし北京既に形勝の地たり故に今ま若し蒙古の蠻族

若くは外省の叛民にして北京を攻取せんと欲すれば西北東の三面に於ては太行の山脈を超へざるべからず而して山西省より來るものは獲鹿縣に近き所に於て太行山脈を超ゆるの一路あるのみにして蒙古より來るものは居庸關の山峽を過ぐると古北口の山峽を超ゆるの二路あるのみ滿州よりするものは必ず路に山海關に由り山東安徽河南等の諸省よりするものは亦た必ず黃河の險を渡らざるべからず地、北方に偏し南方の貢米を漕運するに甚だしき不便を感ずるに拘はらず明の永樂年間以來帝都を此地に置て終に之を移さゞる所以のもの實に此要害あるが爲めなるべし大凡帝王の大都を置くの地は地、廣濶にして數百萬の民衆を容れ邸第宮觀庭園衙門の類の如き造營物を置くに足るの處ならざるべからず空氣乾燥にして居民の健康を維持するに足るべく菓實蔬菜米鹽魚肉の屬、近郊河海に產し建築の材料たる木

石及石灰と都民百萬の燃料なる薪炭とは遠きに至らすして求むべく清潔なる飲料水は井を鑿て得べく又た水道を築て之を得べく而して支那の如く叛民蜂起し屢々皇室を顛覆するの邦國に於ては軍を出すに利に敵を防ぐに便に長に皇室の安泰を期するに足るの地ならざるべからず北京の地、高燥廣濶菓實蔬菜を產し井を鑿て甜水を得べく昆明湖の水を導て水道を造るべく家猪と牛羊とは蒙古の平原より輸入し魚鹽は渤海の濱に採るべく石、石灰及び石炭は西山より出て居庸山海の關、古北獲鹿の險一夫途に當つて萬軍進むべからず獨り漕運交通の便に至つては運河の江淮に通ずるありと雖ども亦た甚だ缺如たるを免かれず且つ夫氣候寒烈にして米を產すること少なく山林の制、擧らざるより木材を外に仰がざるを得ざるは亦た是れ北京の一短所とす然れども文明東漸して滊船の白河に遡るあり電信の各省に通ずる

あり若し鐵路を開きて南方の諸都會に交通するの便を開かば北京の地は帝都を置くに最も適當なる位地の一たるべし

北京の沿革

旅客若し北京の城門に立ち規模の案外に宏壯美麗なるを見退て之を築きしは何の聖帝ぞ又何の虐主ぞ折津の遺跡なるか抑も又大都の故趾なるかを考へ俯仰低回之を久ふする時は誰れか古代の英傑を吊ひ築城者の壯圖を想ひ感慨の情に堪へざる者あらん北京の地往昔堯舜の時は幽都と稱し周に至り幽州と呼び春秋戰國の際には即ち燕と稱し太子丹の住せし處樊將軍の剄ねられし處荊軻の進謁せし處風蕭々の吟をなせし處高漸離の筑を撃ちし處皆な此の近傍なるや疑なしと雖ども舊時の都府は孰れに存せしや歴史の徴すべく口碑の信ずべきなきを以て精密なる場所を指定する能はざるを奈何せん然れども燕

の照王が隗の勸に依りて築きたる黄金臺の故跡は今ま尙は北京城外にあるを以て見れば燕王の宮殿も亦た此の近傍にありしや知るべきなり旅客にして一度此の故跡を見るあらば方今人口に膾炙する請ふ隗より始めよの名言が此の北京の地に於て唇を離れしとを想ひ出さん燕、秦の爲めに秦亦た漢の爲めに滅され爾後一亂一治幾多の變遷を經るも幽燕の城池は常に今の北京城の近傍にありたる如く其外城の西門外に於ける天寧寺は隋の時の建立に係るものにして當時此寺院の城内に在りしは舊記の徵すべきものに乏しからず去れば燕の昭王以來唐の藩鎭宋の府城に至るまで城池の位地は今の北京城の稍や東南に當りたる所にありたるもの丶如し宋の時契丹國を改て遼と稱し大に支那の中原を侵畧し其王大宗の會同元年に於て幽州を以て遼の南京とし今の北京の南に府城を築き名けて折津城と云へり形ち正方

にして周圍三十六淸里圍壁の高さ三丈厚さ一丈五尺敵樓戰櫓を設け以て防戰に備ふ城壁に八門を開き城の西南隅に大內を設く後ち遼主亮の時に至り國を金と改め金主自ら燕に幸し遼の南京を改めて中都と稱し其の府城を大興と名づく此の時城壁を增築して凡そ七十五淸里となす又た城門を增して十二となしたり已にして金亡び宋亦た繼て滅び元の世祖皇帝忽必烈其の至元元年に至りて大興城の北三淸里の地に都城を築く周圍六十淸里同九年名けて大都と稱し十一門を開く當時大興城の遺趾其の南方に存在せしを以て之を南城と稱し新に築く所の都城を北城と呼べり明の起る今の南京に都せしを以て大祖皇帝其の洪武年間に於て幽州の地を大都路(路は今の省の如し)と稱し元の大都を北平府と改め又た規摸宏大に過ぐるを以て將軍徐達に命じ城北五里を縮め二門を廢して九門となし帝の第四子棣王を燕王に

封し北平府に居らしめたり大祖崩し棣王の兄位を踐むに及び暗愚にして國政稍々弛む燕王素と剛毅果斷頗る大祖の風あり竊に異圖を蓄ふもの丶如し戶部侍郎卓敬夙に之れを探知し皇帝に密奏して曰く北平は强幹の地金元の由て起る所宜しく燕王の封を南昌に遷し以て後患を絕つべしと皇帝聽かず時に燕王の侍僧に道術なるものあり頗る權謀術數に富む王に勸めて天下の名士を招集し竊かに軍國の事を謀り機を見て兵を舉げ皇帝を逐ひ位を奪ひ永樂と改元し北平を改めて順天とし以て北京となす然れども永樂皇帝は當時北京に都せしにあらず猶は南京を以て京師となせしかども夙に北京の帝城に適するを知り永樂元年より遷都の事を計劃したり當時皇帝以爲らく遼金は夷狄のみ元能く天下を一統したれども猶は蠻族たるを免れず夷狄蠻族の故城に據り天下に號令するは明の大に羞づる所なるのみならず亦

た以て帝室の尊嚴を維持する所以の道にあらずと即ち遼金の故都と元の舊都との間に周圍四十清里の城廓を築くことに着手せり今の北京內城即ち是れなり永樂十九年に至り工事全く竣る皇帝即ち遷りて北京に都し京師と稱す永樂皇帝が新たに內城を築きしは誠に金元の遺跡に據り帝業を建つるを嫌惡したるに出でしや疑ひなしと雖ども亦た其の遺跡を利用して百二三十清里の外城を築き古今無比の大帝城を作りて子孫萬世に誇示するの志ありしに相違なし然れども規模宏大に過ぎたるより未だ外城に着手せざるに國帑早く已に窮乏を告げ永樂帝の英邁を以てするも遂に其の志を果たすに由なく中途にして工を止め空しく壯圖を懷いて崩せり後嘉靖二十三年に至り世祖肅皇帝祖先の遺志を襲ぎ內城の南面に外廓を築く即ち今の外城なり壁の長さ二十八清里高さ二丈基厚同じく二丈頂厚一丈四尺壁に七門を

開く此の時始めて大興城の遺趾を滅す然れども中都の城壁は今ま尚は內城の北東半里許の處に存す其の形ち土堤に似たるを以て支那人呼んで土城と云ふ明末に至り政令行はれず土豪所々に蜂起し李自成京師を陷れて皇帝を萬歲山に弑じ北京に據り將に帝號を僭せんとするに及び愛親覺羅氏の兵と大に山海關に戰ひ一敗地に塗れ北京守を失す即ち九門城樓を燒き山西省に奔走す是に於て愛親覺羅氏始て北京に入る而て滿州人は荒原に驅逐せし蠻人固より建築の術を知るべき樣なし故に今日に至るまで唯だ其の九門城樓を修繕せし外宮殿橋梁池園等凡て明朝の經營したるものを利用し以て帝都となせり即ち今の北京城は明朝の遺物なりと知るべし

北京城

北京城は內城外城より成る內城を俗に滿城と云ひ明永樂の十九年竣

功せし所にして外城を漢城と云ひ明の嘉靖二十三年の増築に係る二城内の人口は未だ詳ならずウヰリヤム氏のミッドルキングドムには三百万人とあれども其の實八十万内外なるべしと思はる内城は方形にして外城は其の南廓に傅し長方形をなす方形長形相待つて其の狀凸字に類す而して内城は周圍四十清里繞らすに瓦牆を以てす高さ三丈五尺五寸基厚さ六丈二尺頂厚さ五丈門を開くこと九箇南側の正門を正陽と云ひ其の左を崇文と云ひ右を宣武と云ふ北側の東を安定と云ひ其の西を德勝と云ひ東側の北を東直と云ひ其の南を朝陽と云ひ西側の北を西直と云ひ其の南を阜成と云ふ各門に樓あり空を衝くこと九十九尺三面に矢狹間を穿つこと八十壯觀勇姿實に人目を驚かす洋人の嘗て北京に至る天津通州等の支那人街を見以爲らく京城咽喉の地猶は斯の如し北京城の搆造推して知るべきのみと進んで朝陽門

外に立ち樓門の勇壯宏大なるを望見し驚喜措く能はず馬より下りて握手の禮を行ひ以て喜意を表したりと聞く門前に桝形あり又た圍むに瓦牆を以てす牆の高厚は城牆と相均し臺間は自由に城門を交通することを得れども夕刻より閉鎖して通行するを許さず又前門即ち正陽前門の桝形に設けたる三門中左右の兩門を公衆の通行門とすれども中央の一門は常に閉鎖して唯だ皇帝通御の時のみ之を開くと云ふ瓦牆及び樓門を造る所の錬瓦は厚さ五寸にして長さ一尺二三寸なり嘗て咸豐十年の役英佛連合の軍太沽を陷れ、張家灣に戰ひ八里橋に勝ち勢ひ破竹の如く北京に薄りて安定門を占據せしが當時英軍の某士官は瓦牆の厚大堅牢なるに驚き其の携ふる所の野戰砲は能く之を打破し得べきや否やを疑へり旅行者若し前門の裏手より階段を登り牆上に立ち四顧すれば南に外城の市街を見るべく北に王宮の景山に

據りて宮牆に圍繞せられ外部に親王府と宗室旗人の邸第と市街との間に參差するを見るべし瓦牆の頂上(即ち馬踏)は幅六七間あり七八輛の人力車を並べ馳することを得べく楡樹其の他の灌木所々に生長し又た番兵の菜園となりたる處あれども散歩場として最も屈強の場所なるべし前門の正北に當り石を甃み石欄を繞らしたる廣庭を見る其の北に聳ゆるものは皇城の外門なる午門にして夫れより北數町の間紫禁城の大廈高樓及び宮殿の屋を接するを見るべし內城の中には衙門親王府公使館米廩等あり、且つ又た旗人の邸第多し旗人は即ち愛親覺羅氏に隨從し滿州の平原を出て大業成るの後世祖順治皇帝の時に至り王城護衞の爲め邸を內城に賜はりしものにして即ち所謂八旗兵なり而して八旗兵には正黃、正白、正紅、正藍、鑲黃、鑲白、鑲紅、鑲藍の八種あるを以て其の旗色に依りて區別し白及び鑲白は王城の東に紅及び鑲

紅は西に藍及び鑲藍は南に黄及び鑲黄は北に邸第を賜はれたり蓋し支那人は東西南北を以て白紅藍黄に比するの迷信を懷き居るを以てその故なり斯くして內城には滿州人多きが故に遂に內城を滿城と呼ぶに至りたるなり外城即ち外羅城は幅一里長さ二里半許瓦牆の長さ二十八清里高さ二丈門を開くこと七つ其の北側は內城の南側と相接し其の東牆は內城の東南隅より始まり西牆は西南隅より起る面積は百万の人口を住せしむるに足るべし南方の一半內城に接したる街路は稍々繁盛なれども北部は池塘沼池にして人家なし

皇城

皇城は內城の中部にあり其の形ち方形にして周圍十八清里餘繞らすに瓦牆を以てす牆の高さ一丈八尺基厚六尺五寸頂厚五尺二寸南に三門東西北に各一門あり南方の大清門を以て正門とす城內南部に紫禁

城即ち皇帝の宮殿あり又其西部に西苑あり苑内昆明湖の水を引き三箇の湖水を設け之れに瓦牆を繞らす猶は我が吹上禁苑の如し皇城の東北には滿洲人の居宅多く官衙も亦た少なからず多少の民家もあり此等の場所は通行の自由なる我丸の内に異ならず

紫禁門

旅客は紫禁城外を自由に見物するを得べけれども城内に入ること叶ふべからず左りとて万里の山川を越へて遥に北京旅行の途にあるもの高牆一圍を隔てゝ宮殿の屋上を見ながら之れを外に過さんは如何に口惜しかるべき依て今茲に城内の摸様の大體を記し旅客の臥遊に充てんとす紫禁城は南北各二百三十六丈二尺東西各三百二丈九尺五寸四隅に角櫓あり周圍に四門あり皇城の端門に接する午門を正門とす午門を入れば左に嘉量(度量衡の原器)あり右に日圭(日時計)あり午門

以内は神武門に至るまで一門一宮更る〲相接す午門の次ぎを大和門と稱す大和門の後に大和殿あり殿基高さ二丈殿の高さ十三丈間口十一間奥行五間前面の柱十一列にして側面は六列なり前面の階段は蠟石にて疊み五段をなす階段を登れば紫銅を以て鑄造したる十八個の鼎あり是れ實に帝國の主權を代表するものあり蓋し周の世に在ては全國を九州に分ちしが故に其の主權を代表するもの九箇に過ぎざりしなるべけれども方今は全國を十八省に分ちたれば十八箇となせしも亦た無理あらず鼎の側に銅製の龜鶴各々二あり龜は強健を鶴は長壽を代表すと云ふ又た其の傍に日圭と嘉量とあり時と量とを代表す
此の宮殿は元旦冬至万壽の三大節其の他國家に大慶典あるとき皇帝親御して群臣百僚の賀を受け又た將官に命じて師を出さしむるのとき及び學士を對策するとき皇帝の親臨する處あり大和殿の後に中和

殿あり中和殿の後に保和殿あり宏壯大和殿に及ばざること遠しと雖ども猶ほ巨多の人士を座せしむるに足る每年除夕此殿に於て蒙古諸部の酋長及び朝鮮使臣の在京するものを饗應す又た新進士を朝考するとき皇帝自ら此の殿に御す保安殿の後に乾淸門あり門內に乾淸宮あり進士を召對し庶僚を引見し每年元旦諸王子を饗應する所なり又た乾隆以降國家養老親々の至意を擧ぐる爲め此の殿に老人を招きて特に金帛を賜ふたることあり乾淸宮の後に交泰殿あり皇帝の寶璽を藏む次に坤寧宮あり坤寧宮の後に坤寧門あり門外は御花園にして園は神武門に接す神武門は即ち紫禁城の北城あり以上の諸宮殿は之れを我國舊幕の制に比すれば所謂御表に屬するものにして後宮即ち大奧は前記諸殿の左右にあり坤寧宮の東西に東六宮西六宮の二殿あり是れ即ち白樂天が六宮粉黛無顏色と咏じたる三千宮女の起居する所

にして今の皇帝の生母を東大后と云ひ慈禧皇后を西大后と稱するは其居る所の後宮の地位より名けたるものなり而して皇帝の居殿は紫禁城の西北隅西六宮の傍に在り

西苑

西苑は皇城内北部にある皇帝の遊園にして遼金の中都を築くに當り此の地風景絶佳なるを以て離宮を置く其の後忽必烈の大都を創するに際して大内を池畔に築き漢朝の制に倣ひ池名を大液と稱せり爾後此名を因襲し以て今日に至る南北十六町東西凡そ三四町なり而して此池の北端に於ける一部を北海と云ひ南端を南海と云ひ其中間にあるものを中海と云ふ中海と北海の間に白大理石の石橋を架す橋の兩端に華表を建つ其の東にあるものを玉蝀と云ひ西にあるものを金鰲と云ふ故に御河橋或は稱して金鰲玉蝀橋と云ふ此の橋は皇帝妃嬪遊

覧の時を除くの外常人の通行を許すが故に旅行者にして苑内の景色を知らんと欲せば橋上に佇立して眸を池上に放つべし橋北漣漪動き魚鱗游泳するの所奇石怪巖池上に現る是を瓊華島となす島上樹木鬱蒼中に白色華表の隱現するを見るべく島邊總て奇石壘々として旅客の目を驚かすに足る此の奇石は皆な宋の艮嶽の遺物にして元朝の時河南より運びきたるものなりといふ瓊華島の北數町にして長方形の牆壁樣のものを見る是れ即ち蠶壇にして春季皇后親ら此の壇に幸し蠶を養ひ以て衆庶に養蠶を奬勵する所なり周圍一千六百尺にして中に桑樹を植ゆ其中に徑四十尺高さ四尺の壇あれども橋上より之を見れば唯だ遙に外圍を見るのみ又た其の西方に喇嘛敎の寺院あり傍に露佛立ち池畔には老松古柏鬱蒼として千古の綠を蓄へ禽鳥常に樹間に戲れ風景の絶佳なるは言までもなく庭園の宏大なる其比稀なり更

に眼を轉じて橋南を望めば園林堂宇に圍繞せられたる一面の湖水を見るべし是れ所謂中海なるものなり東岸の丘陵を瀛臺と云ふ楡槐の數百年を閲したるものの岸に臨みて蒼々たり盛夏の候荷花滿池清香愛すべし又盛冬に至れば八旗の禁旅此の傍に集り氷嬉(氷り滑り)を習ふ丘上に萬善殿あり此にて外藩諸王及其の使臣を饗應す對岸に紫光閣あり擧科毎に武進士の騎射を殿試する處なり又た毎年外藩諸王及び其の使臣を饗應するに用ふ南岸に行宮あり四五年前西太后攝政を止め皇帝親ら朝に臨むに及び工を起して大に修繕を加へ太后の隱居所的宮殿となせしものなり嘗て行宮の後なる西苑の外に乾隆帝の勅許を經て建立したる佛人の天主堂あり高樓空に聳ゆ若し此の堂に登るときは北京西部を見下し得るは勿論中海中の宮殿樓閣歷々として指摘することを得べきを以て支那人は心竊かに恐懼の念を起し殊に其

の風水の說に惑溺するを以て外人の大廈皇城の正東に聳ゆるときは鬼之れより大內を窺ひ妖災漸く多からんと思ひ西苑の東牆を高ふし以て妖鬼を避けんとせしが太后の行宮に遷るに及び益々迷信を厚ふし遂に之れを取拂はしめんとしたり然れども佛人も素と勅許に依りて之れを建立したるものなれば固く執りて動かず茲に於て李鴻章伯は特使を佛國及び羅馬法王に遣し只管其の取拂ひを乞ひ巨額の移轉費を出して始めて之れを移轉せしめたり蓋し支那人の天主堂を恐れたるは宛も我邦人がニコライ教堂を恐るゝに類し其の高牆を設けたるは恰も駿臺に富士山を築かんとの說を持出したるに同じ奇と云ふべし

景山

景山は或は萬歲山と稱し紫禁城の正北神武門外に一區劃をなせる假

山なり圍垣十二町風水の說に依り正北を鎭する爲めに築きたるものなると恰も京都の比叡山に於ける江戸城の東叡山に於けるが如し擁內五峯あり其の中央なるもの最も高く左右の四峯、一峯は一峯より低し峯上に各々小亭ありて佛像を安置す直立百四十七尺斜面二百十尺許平地の間に屹立するを以て北京城內何れの處にても之を望見することを得るなり傳へ云ふ數百年前籠城の際に備へん爲め巨量の石炭を此地に埋め土を掩ふて山となしたりと故に又た煤山の名あり支那人に就きて聞く所に依れば山上の老樹鬱々として影をなす故に景山の名ありと又た一說に依れば忽必烈蒙古に名木を發見し之を北京に移さんとせしも數十里の沙漠を越へ大木を運搬することなれば部下の衆皆な之を危ぶむ忽必烈以爲らく朕單身蒙古を出て四海を平定し威異域に及ぶ朕の力を以てすれば何事か成らざらんと即ち大木を象

に繋せ遂に北京に持ち來り今の景山に植へたり忽必烈其の樹影の搖く々たるを見て大に喜び景山と名けたるなりと

大廟

大廟は紫禁城の南東に位し天安門内の右にあり愛親覺羅氏の宗廟を祀る天壇に次ぎて神聖なる處とす中に三殿あり前殿中殿後殿と云ふ宗室の人々毎歳々暮大廟に參拜するとき前殿に於て其の式を行ふ而して前殿の東廡には配饗王公の位牌を西廡には諸功臣の位牌を安置す中殿には歷代皇帝皇后の神龕を安置し後殿には祧廟神龕を安置す凱旋の時には皇帝自ら告文を此廟に奉ず

社稷壇

社稷壇は周朝の慣習に從ひ造營したるものにて土地及び穀物を祭る處なり圍壁の長さ七百六十四尺東は藍色西は紅色南は白色北は黑色

の瓦を以て之を築く蓋し支那人は方位を四色に象るの慣習あるに由るものならん中央の壇は五十二尺平方にして高さ四尺北方に面し西山々脈より出つる所の白色大理石を以て之を築く又た其の階段は藍、紅、白、黒、黄の五色の土を以て塡充す是れ方位を四色に象るの外中央は黄色なりと信ずるに由るなり以上記する所のものは皆な旅行者の目撃し能はざるものなれども旅行者は此の案内記に依り外部より僅かに屋上を望み彼は大和殿なり此は紫光閣なりと指摘することを得べし而して特に記臆すべきは政府の建物は概ね黄琉璃と名くる瓦を以て親王府は青琉璃を以て其の屋根を葺くことなれば瓦の色に依り此の案内記を參照せば建物の何たるを畧ぼ識別することを得べし又た皇帝の宮殿を知らんと欲せば西部より紫禁城を望み乾清殿と中和殿との間に黄色の屋根を見るべし是れ即ち皇帝の宮殿なり

内城の北西部

皇城内を見了りたれば是れより後門なる地安門を出で十刹海と云へる蓮池に沿ふて總督衙門即ち北京警視總監の衙門に至り夫れより有名なる鼓樓鐘樓を見るべし鐘樓には明の永樂帝か鑄造したる重さ十二萬斤の鐘を懸く夜深く風靜に人眠り氣定まるの時之を撞けば響き二里四方に殷々たりと云ふ又た鼓樓の中にては線香を燒きて時刻を計り鼓を打ちて之れを府民に報ず今日學術進歩の世に際し時計の輸入あるにも拘はらず依然として舊慣を改めざるは例のお流義に國粹を重んずるの一端ありとも云ふべき乎兩樓を過ぎ十刹海を渡れば恭親王の府に達す唯見る青琉璃の大厦高く空を衝て秀つる樣規摸如何にも宏壯なるべしと思はるれど圍壁に沮てられ內部を窺ふに由なし府より歩を南に轉し皇城の西に至れば大街の四辻に達す此處に西四

牌樓あり形ち稍や華表に類す此邊內城西部中最も繁盛なる市街なり是れより程近き處に帝王廟あり明朝中代の建立に係り歴代の聖主賢王を祭る彼の暴君虐主及び僭位の君主は此に祀られざること勿論なるべし是れより西に白塔寺あり今を去る七百年前遼金の時の建立に係るものにして白色一字の高塔なり塔より西南部には見るべきもの少なし依りて歩を東北に移して先づ雍和宮を見るべし

雍和宮

雍和宮は、元と康熙帝の太子の宮殿なりしが太子位に即くに及び之れを喇嘛僧に與へ寺院となさしめたるものにして其の宏大なるは清朝中興の祖と稱せられたる康熙帝の皇子の宮殿なりしを以て知るべし現時一千四五百人の喇嘛僧此の宮に經典を講習す朝々の聲常に宮外に溢る而して此等の僧侶は嘗て西藏より來りたりと稱する活佛の支

配を受け居れり喇嘛教徒は此の活佛を以て決して消滅に歸する者に非すとなし一たび入寂する時は直ちに其の信徒中の腹に宿り化身して再び活佛となることを信ずるが故に入寂と時刻を同ふして配下の民家に誕生するものを指して活佛の化身なりと稱せり清朝喇嘛教徒に於ける保護頗る重厚にして今日に至り猶は益々保護奬勵するの形跡あるは支那事情に通せざるものゝ奇怪に思ふ所なるべけれど是れ實に清朝の蒙古人に對する深遠の政略より出てたるものなりといふ蒙古人は素と慓悍勇武にして常に髀肉の生ずるを嘆じ遂の入侵以來屢々邊境に寇し歴朝の累をなし來りしを以て清朝に至り此の禍根を絶たんには古來より蒙古人の惑溺する喇嘛教僧侶を籠絡して益々保護奬勵し蒙古に喇嘛教を弘布して其の慓悍勇武の氣象を喇嘛教に注入せしめ漸く之れを湮滅せしむるに如くものなきを發見し爾後此の政

畧に依りて大に其の効を奏せしなり皇帝の嘗て雍和宮を寄附したるも實に此の政畧を施行するの一端として見るべく又た嘗て活佛の入寂するに當り同時に二人の小兒の誕生するありて孰れか化身なるかに就き紛議を生じたることあるに際し時の皇帝は此の機に乗じ一には同教に干渉し一には教徒の歡心を得ん爲め黄金の瓶を造りて之れに二箇の鬮を投じ壯重なる儀式を以て小兒の母親をして之れを採らしめたることありき是れ皆な清朝の蒙古に對する政畧の實行に外ならざるなり

孔廟

孔廟は即ち文廟にして雍和宮の西にあり我が聖堂の如くに孔子の廟と學校とを兼ねたるものなり門に入れば廣庭あり元明以來の古柏(我國のひばなり)庭中に繁茂し翠色滴らんとするの間孔廟の前面を見る

頗る莊嚴の觀あり孔廟は高さ五丈安南地方より持ち來りたるチーク材の大柱前面に駢列す三箇の楷段あり各々大理石を以て之を築く長さ十四間巾七間段楷十七堂宇の中央に漢字及び滿州字にて至聖先師孔夫子之神位と記したる孔子の位牌あり其の左右に顏回曾子子思孟子の位牌を安置す唐朝の時は孔子の偶像を此廟に安置せしが明朝に至り偶像を安置するは神明の威嚴を損するものなりとて之を廢し位牌に改め爾後今日に至る位牌は高さ二尺五寸巾六寸之を高さ二尺の壇上に置く牌面は赤地にて之に金字を鏤刻す又た從來は廟内に孟子顏回及び他の十哲の座像を供へしが今日は朱熹外二人の座像を加へ增して十四箇を安置す又た左右の廊下に古今聖賢哲士の神位あり廟の入口の左右には有名なる十箇の石鼓を置く石鼓は韓退之の石鼓の歌となり蘇東坡の後石鼓の歌となり其の他詩に文に之を頌したるもの

多きを以て我邦人の夙に耳にする所なるべけれども之を見たるものの蓋し少なからん旅行者にして若し支那古典に志あるものならんには一見無量の感を起さゝるを得さるべし今ま簡に從ひ其の歴史及び形狀を記さんに石鼓は黒色花崗石にて造りたる大鼓狀の石塊にして大さ我が醤油樽の如し往昔岐陽にありしを後に今の陝西省の西安府(周の西都なり)に移し終に今日の處に移したり韋應物の說に依れば石鼓は文王の鼓にして宣王其面に詩文を刻したりと又た韓退之は直ちに之を以て宣王の鼓なりと云へり其の孰れか眞なるや素より知るに由なしと雖ども唐朝の後屢々草野に棄てしを有志者拾ふて之を孔廟に供へたり然れども當時其の一を發見することを能はざりしが宋朝に至り之を民間に求め得たり鼓面に彫刻したる詩文は宣王の功績を頌したるものにて其の文字の讀むべきもの僅に三百二十五字に過ぎず歟

陽修は嘗て讀むべきもの四百六十五字あり過半讀み難しと云ひしが現時讀むべきものは僅々三百二十五字に過ぎざるを以て見れば唐の時代より今日に至るまでに百四十字の磨滅せしを知るべし彫刻の字體は大篆にして東坡の歌に憶昔周宣歌雁鴻、當時籀吏變蝌蚪とある籀吏は即ち此の字體を指したるものならん此の石皷れ斯の如き沿革もあり且つ稀有の寶物なれば其の字體の年と共に磨滅せんことを恐れ乾隆皇帝新に石皷を摸造し堂の南側に置けり堂前の廣庭に黄琉璃の屋根を以て敝ひたる六箇の告成碑あり大理石の垣を以て之を圍む告成碑は即ち凱旋を孔廟に告ぐるの紀念碑にして康煕四十三年朔漠(西蒙古)を雍正十三年青海(東西藏)を乾隆十四年金川を同二十年準噶爾伊犁を同二十四年回部(回々教圖)を同四十二年金川を征服せしとき建設せしものなり支那人は概して不潔を意とせざるを以て神社佛閣皆な

塵埃の中に埋まり如何なる壯觀と雖ども更に其の眞質を見ること能はざるものなれども孔廟は流石に支那政教の本尊なる孔子を祭る處丈けありて他の神社佛閣の如くに不潔ならず人をして自ら尊敬の意を生ぜしむ玆に旅行者の廟内に入るに付き注意を要すべきことあり孔廟に入らんには門番に多少の金錢を與ふべきことなれども門番は外人に對するときは頗る不親切にして巨額の金錢を貪らんとするが故に豫め支那人の案内者を傭ひて伴ひ行き案内者をして金錢を與へしむべし左すれば僅か二三十錢にして事足るべけれども直接に之を與へんとすれば五十錢は愚か時に一圓をも請求すべし是れ唯に孔廟に於て然るのみならず其の他の寺院等を見物する時に於ても斯の如し

辟雍宮

辟雍宮は孔廟の西國子監の搆内にあり乾隆帝始めて之れを建設す蓋

し古典に在昔の帝王は辟雍を建て圓河を繞らすとあるに則りしものならん宮殿は檐下一丈六尺棟は方形にして頂に擬寶珠を付す其の搆造誠に奇異なり周圍に圓狀の濠あり是れ即ち圓河なり殿の前面には黄色陶器の門ありて左右には二百箇の石碑あり碑面には四書五經を列す是れ秦始皇の書籍を燒盡したることありしより文學社會に恐慌を起し後世暴君の再び書籍を燒盡することあるを慮り豫め之れを石に刻し以て萬世に傳へんとの意に出てたるなりといふ

天壇

天壇は外城永定門内の東部にあり紫禁城を去ること一里半許り皇帝の天を祭る處とす其の之れを外城に設けたるは往昔より天地を南郊に祭るとの古格あるを以て故らに之れを内城に祭らず外城を南郊と見做し此處に之れを祭りしものならん壇元と天を祭るが爲めに設け

たるものなるを以て形を天に象り圓形となす故に或は稱して圓丘と云ふ明の永樂八年の創設に係り圜壁十淸里南に面し白色大理石を以て甃みたる三重の圓壇より成る上段は徑九丈高五尺七寸中段は徑十五丈高さ五尺三寸下段は徑二十一丈高さ五尺表面は各々石を敷詰め蛛網狀をなす即ち上段の中心に一箇平圓形の石あり之れを圍むに九箇の石を以てし更に繞らすに十八箇を以てし順次此くの如くにして遂に八十一箇に至て止む中段は上段を中心とし九十箇を以て圍み百六十二箇に至り下段も亦た中段の上段に於けるが如く中段を中心とし百七十一箇を以て之れを圍み二百四十三箇に至りて止む蓋し支那人は天の數を以て陽數となすが故に徑も高さも亦た石數も悉く奇數或は奇數の乘數を用ひたるならん三段共に白色大理石の欄干を繞す而して上段の欄柱七十二本(8×9)中段百八本(12×9)下段百八十本(20×9)

合して三百六十本となる蓋し亦た天の周度に象りしものなり上段に天帝及び日月星辰太歳の神位を安んず毎歳冬至皇帝親しく天を祭るが爲め鳳輦に御し紫禁城より大和門を出で此處にて鳳輦を降り象の車に御して天壇に幸し先づ搆内の皇穹宇に臨み上帝並に祖宗を拜し更に齋宮に入り齋戒沐浴し翌朝拂曉齋衣を着し徒歩して壇に登る此の時皇帝の中段に至りて跪くを相圖とし段下の燔柴爐に犧牲を燒く是れより皇帝進んで上段に登り跪て香を捧げ三拜九叩の禮を行ひ繍裳、綵線、玉瑠等を天に捧げ告文を朗讀す猶は種々の儀式あれども孰れも支那の特質と稱すべき莊重嚴肅あるものなり特に四億四百十八万人の主權者たる至聖至尊の皇帝が齋衣を纒ひて壇上に跪き香烟裊々立ち昇るの處朗々として告文を讀み數百の群僚中段下段に跪座するの狀は想像するだに轉た尊重の念を起さしむるに足るなり壇の

西同構内に祈年殿あり是れ即ち殷の湯王が雨を桑林の野に祈りたる故事を學び民庶旱魃に困むの時皇帝の雨を祈るの處あり而して支那にては我が邦人の熟知するが如く旱魃水害皆な以て皇帝の德治まらざるに因るものなりと信ずるが故に旱害水災起るときは皇帝は自ら咎を引き徒歩して此の殿に幸す殿は壇上に於ける高さ九十九尺の建物にして三段圓狀の屋根あり檐下の欄間には數多精巧の彫刻を裝飾す宏大莊麗精緻堅牢北京第一の建物と稱せられしが先年雷火の爲めに燒燼し當時唯だ其の基礎を存するのみ惟ふに現政府は再び之れを建築するの資力なきを以て爾後永く壘々たる遺跡を止むるに過ぎざらん歟

先農壇

先農壇は永定門内の西部にあり神農氏を祭る處にして天壇の如くに

宏壯ならず春季には皇帝此に臨幸し自ら耒耟を執りて民に農事を勸むるを例とす構內に天神、地祇、太歲、神農の四大壇あり孰れも記すべき程のものにあらず天壇、先農壇共に外人の入るを許さゞれども若し强て之を見んと欲せば亦た其の道なきにあらず其は案內者に命じて適宜取り計らはさすべし先づ外城內の見物は是れにて止め夫れより再び內城に歸り各衙門等を見物すべし

六部

淸國の中央政府は工、兵、吏、戶、禮、刑の六部より成り其の官衙は皇城大淸門の東西にあり東側にあるものは東に面し西側にあるものは西に面す是れ皇帝は南面して朝に立つの制に從ひ皇城を南面に築きたると同じく大臣は皇帝の左右に對立して政を執るの意に依り其衙門を皇城の左右に駢列せしめたるなり傍に鴻臚寺、欽天監、太醫院、宗人府、大常

寺、都察院、大理寺等特種の官衙あり孰れも萬様一列碧瓦を以て屋根を葺き正面に寺門の如きものあり門を入れば廣庭あり廣庭を過ぎて本廳に達す廳內には尙書侍郎以下屬僚列座事務を執れり門外より本廳を望めば庭內草生して塵埃廳を埋め甚だ清潔ならず旅行者古寺廢剎と誤認する勿れ

交民巷

交民巷は大清門より東に折れたる街路にあり各國公使館のある處即ち是れなり而して英國公使館は元と某親王の府なりしを連合軍の兵を撤したる後此を借り受け修繕を加へて公使館に充てしものなれば純然たる支那家屋に過ぎざれども英人の手に歸せしより大に清潔となり先づ大英國の公使館として左迄に見苦しからざるに至れり日本公使館は元と朝陽門內の北六條胡洞にありしが各國公使館と半里許

りの距離ありて不便尠なからざるを以て六年以前之れを交民巷に移したり其の建築は工學博士片山東熊氏の設計監督に成りしものにて一層なれども相應に美麗なり門前の道路は不潔を極め臭氣紛々鼻を打つ然れども政府は恬として顧みず公使等も亦た其の奈何ともなし難きを知りて已むなく之れを默許せるものゝ如し

總理衙門

總理衙門は內城の東南部にありて六部衙門と處を異にす支那の官制には外務衙門を置かず滿洲朝鮮等は對等の外國に非ざるを以て其の交渉事件は鴻臚寺にて取扱ひ來りしを現今國際の必要に迫られて假りに總理衙門なるものを官制外に設けたりしが次第に發達して遂に今日の如く廣大なる權限を有するに至りしなり左れば其の衙門の如きも素と貴族の邸宅を假宅したるものにして體裁凡て他の衙門と異

なり邸内中央の庭園に在る花廳即ち四望堂を以て應接所とし四圍の建物を事務室とせり奇と云ふべし衙門に附屬して同文館あり洋人の所謂Peking Collegeにして各國の國語を敎授する處とす本邦駐在公使汪鳳藻氏は實に此の同文館の出身なり

觀星臺

觀星臺は内城の東南隅、城牆の上にあり忽必烈の時代に建設せるものにて當時の製造に係る銅製の渾天儀其の他の觀測器今猶は廣庭に存す康熙皇帝の時に及びゼスイット敎の僧侶に命じ新たに器械を製造せしめたり今ま猶は存す

市街

北京市街は他の支那都城と異なり路幅頗る廣く大路の如きは幅二十間許にして其他の街路と雖ども我が東京の如く迂餘曲折せるものに

あらす故に道慣れざる旅行者も大體の地理を諳ずるときは道に迷ふの虞なし然れども此等の大街の道幅は斯くの如く甚だ廣濶なれども路中二條に露店様の建物櫛比して不體裁云はん方なし先年曾紀澤の歐洲より歸るや露店を取り拂はんことを建議し之れが實行に着手したりしが露店の所有主中に親王其の他高貴の人々ありし爲め遂に其の業を遂る能はずして止みたりと云へり此等の建物は素と一の露店たるに過ぎざりしや疑ひなしと雖ども放任默許の極遂に固定の建物となり今日に至りては復た之を動かす能はざるに至りしものあり旅行者之れを見ば我が政論家の所謂箇人的自由なるものも業に已に支那に於て行はれつゝありしを知らん市街の地下には花崗石の大下水ありて汚水を疏通す浚渫だに行届かば衞生上其の利する所少なからざるべきに街路に露店より進化したる建物を設くるを默許すると同じ

く敷設以來殆んど棄てゝ顧みざる爲め汚水少しも通せず折角の大下水も今は全く無用の長物となり了れり嘗て聞く御史其の浚渫の不完全なるを皇帝に奏したるより浚渫檢査の議起り官吏は其の受負人と共に實檢せんとせしに受負人は人をして下水中を通行せしめ以て浚渫の完全なるを證明せんと主張し乃ち一人を一方の下水口に入れたるに暫くにして他方より出で來れり依て檢官は浚渫の全くして汚水の能く疏通したるものと認め無事檢査を了りたりしが其の實下水に入りし者と出で來りし者とは全く別人なれども素と雙生の男子を擇びて同樣の衣服を着けさせたるを以て斯くとも知らず欺かれしにて汚淤の中部に充塞すると依然なりしといふ是或は事實ならずとするも亦た以て浚渫の行屆かず監督者が屢々奸計の爲めに欺かるゝの例あるを知るに足るべし

内城は紫禁城の外に親王宗室八旗等の邸宅多く市街は我維新前の屋敷町の如くなるを以て往來する人も官吏風紳士風の者多く店舖も概して繁盛ならざれども各門に通ずる大街は相應に繁昌し殊に東邊に於ける東四牌樓の近傍の如きは頗る雜沓を極め宏壯なる商舖の軒を列ぬるを見べし然ども此等の商店は多く小賣營業をなすものにて問屋向の大なるものは外城の前門大街等にあり而して外城の琉璃廠(琉璃廠あるを以て市街の名とす)には骨董、書畫、書籍店等櫛比するを以て案内者を伴ひ此處に赴き土產物を購ふも面白かるべし又外城には劇場酒樓等あれば就きて支那の人情風俗を察知すべし旅客の市街に散策を試み喫驚すべき者一にして足らずと雖ども廛舖の燦爛として人目を眩まさんとするものも亦た其一なるべし廛舖の前壁には雲鶴、或は松竹梅の彫刻を裝飾し之に金箔を置き其の美麗なるは恰も芝上野の

御霊屋の如し然れども彫刻多くは塵埃に掩はれ燦爛たる光輝を放たざるは勿論時に全く實質を見ること能はざるは支那人の特性として掃除に注意せざるに由るなれども若し我が銀座市街に移し我が邦人の手に歸せしめば田舍漢の之を宮殿と見誤ることもあらん北京市民は石炭を燃料となし其の冷灰は悉く街路に投ずるを以て永樂年間北京開設以來の灰は幾尺ともなく街路に積れり特に北支那には降雨少なきか故に其の固結せさるもの一二尺の厚きに達することもあれば市街を徒歩するに當りては火事見舞に赴くの心地すべし斯の如くなれば微風も尚ほ且つ市街を紅塵堆裡に埋め去らんとす況して強風吹き荒むときは實に紅塵萬丈も啻ならす白晝猶ほ咫尺を辨せさることあり外城より之を望めば恰も火事の如し又た支那人は毎朝尿水を街路に棄つるを以て街路自ら臭氣を帶び紛々として鼻を襲ふ故に口惡し

ぎ洋人は北京を評して天雪隱なりと云へり街上を見渡せば淺黃、水淺黃、杏黃等派手なる色合の衣服を着け大なる團扇を手にし悠々として閑話し三々伍々隊をなす學生あれば緇衣を着する僧侶あり道敎の道士は道服を着け喇嘛敎の僧徒は黃色の法衣を纏ひ、滿洲蒙古琉球西藏の諸人種各々固有の衣服を着し市街に往來するあれば數輛の馬車列を爲して貨物を運搬し騾馬驢馬其の間に交り又た冬期蒙古地方より貨物を運搬する駱駝は十四五匹の隊をなし徐々西門より入り來るを見るべし

八旗の總敎場

總敎場は內城の北門外にあり八旗の練兵場なれども近來淸朝の紀綱稍々弛み旗人は大槪貧に迫り復た滿洲の平原より出でゝ四百餘洲を蹂躪したる勇壯の氣象は去て全く迹を留めず是れぞ光緒皇帝の近衞兵

なりと思へば轉た十八鼎の輕きを覺ゆ左れば近頃此處にて八旗を練習することゝなし唯だ近來外國の刺激を受けたるより旗人中强壯の壯丁を擢でゝ神機營と名くる一隊の兵を設け之を醇親王の配下に置き此處にて洋式の練兵をなすのみ

黃寺

黃寺は總教場に接し其の北に位す喇嘛教の寺院にして雍和宮の如くに活佛あり黃寺も亦た喇嘛教徒を籠絡する爲め淸朝の設立したるものにて搆內に白色大理石の高塔あり四面に釋迦一代記を彫刻す此の高塔は喇嘛教高僧の墓牌にして曾て乾隆皇帝が喇嘛教徒の歡心を得んが爲め西藏よりターライ、ラヤと云へる高僧に次ぐ名僧を北京に招きたることありしに不幸にして天然痘に罹り黃寺に死したるを以て皇帝即ち遺骸を送り還へし衣服を埋め此の名僧の紀念の爲めに建立

したるものなり石塔の傍に外館と稱し西藏人の旅館あり西藏より入貢するとき此處に宿泊せしむ蓋し入貢者の爲め特に旅館を設け鄭重の待遇をなすは清朝が外藩を籠絡するの政畧に外ならざるべし旅行者は黄寺を見了りたれば此處より半里許にして元の大都の遺址あれば序ながらに見物すべし先づ北京城の見物は大略以上の諸箇所に止め是より西山近傍の名勝古跡を探り進んで支那帝國の偉觀否世界の偉觀なる萬里の長城を見るべし

北京出立

西山一帶の地方より圓明園へ掛け長城明陵等の名勝を探らんには大概四日の日子を費すべけれど簡略に見物せんには三日位にて充分なるべし此の間の道中には馬車を雇ひ支那人のボーイを伴ふを便とす馬車賃は一日一圓五十錢位、又たボーイは日當二三十錢に過ぎず二三

十錢の費用を愛しみてボーイを伴はさるときは非常の損失と不便とを祟ることを免れず第一旅店に宿泊せんに不案内の外國人と見れば狡猾なる店主は過分の宿賃を貪ること珍しからず此時若しボーイを伴へば彼は店主と談判し相當の宿賃を定むべし第二見物を許さゞる場所へもボーイに數十錢を握らせ周旋せしむるときは入場すること敢て難きにあらず其の他鎖末の便宜は一々枚擧すべからず又た天津北京間の道中の如くに臥具食物の準備を忘るべからざるは云ふまでもなし斯くて出發の準備整ひたれは西定門を出で行くこと七淸里許りにして大鐘寺に達す

大鐘寺

大鐘寺は明の永樂皇帝の鑄造せる銅鐘を安置せんが爲めに建立せしものにして本名を覺生寺と云へど大鐘あるが故に人呼びて大鐘寺と

稱す鐘は口徑一丈二尺幅之れに稱ひ內外一面に法華經を鑄出す鐘は佛殿の後の鐘樓に懸く

圓明園

西定門を去る五里にして西山と云ふ地あり山に沿ふて圓明園、萬壽山、玉泉山、碧雲寺等の諸名勝あり圓明園は咸豐年間迄皇帝避暑の離宮なりしを以て西定門より一直線に石路の設けあり今は壞敗に屬して車馬を驅るに危し唯だ通州石路の如く甚しきに至らざるのみ園の規摸頗る宏大にして門十八箇所、園內の殿、院、亭、軒、館、樓、書屋等精を萃め美を盡し輪奐壯麗世界多く其の比を見ず又た皇帝は夏日數月の間を此の地に費やすを以て園外に中央政府六部衙門の出張所あり從て近傍に親王、大臣の別墅多し咸豐十年の役、英佛一萬五千の兵、破竹の勢を以て北京を陷るゝに當り聯合軍は支那政府がパトクス、調停の使者、及擒虜

等を殘酷暴戾に待遇せしを憤はり此の名園を燒き燒け殘れる部分は之れを壞ち以て憤怒の情を漏したり當時聯合軍の將校中此の名園を憤怒の爲めに焦土と爲すを惜みたるものなきにあらざるべけれど兵士憤怒の情は將に北京を屠らんとする迄の熱度に進みたるを見て已むなく此擧に出でしならん現時は雜草蔓々瓦礫壘々の裡に埋もれ池上には水草の掩ふありて復た昔日豪華の跡を留めず狐狸巢くひ野鳥飛び日色暗憺微風醒膻草戰ぎ葉落つるの時は行客をして轉々今昔の感に堪へざらしむ今ま其の遺址に就き舊時の觀を察するに石を疊みて假山野景を造り湖心に小島を築きたるあり回祿以前は四十景ありて庭內に四十景色の變化ありしものなるべしと思はる要は迂餘曲折せる湖畔に沿ひて種々の風景を設けたるものなり今日稍々舊形を存するものは園隅の洋館と黃琉璃製一字の高塔と湖心の涼宮とのみ洋

館は乾隆の頃皇帝ジェスイット教の僧侶を招き花崗石を以て建設せしめたるものにして聯合軍が園内を蹂躙するに當りても其の意外に堅牢なるを以て遂に之れを破壊すること能はすして止みしと云ふ現時雜草蔓々の裏に存す堅壁處々破壊せられたる所あり又た湖上の涼宮は風致愛すべし咸豐の役治まるに及びて西太后は此園を修繕せんとし之れを有司に命せしも國帑支ふる能はず荏苒十數年を經過せしが近年に至り愈々修繕に着手し外人の入園を許さゝることゝなりしもボーイに入園のことを取計らはしむれば容易に入覽するを得ることもあるべし

昆明湖　萬壽山　玉泉山等

圓明園の南半里にして昆明湖あり元と玉泉山より流出せる泉水の潴りて湖と爲りしものにして四岸の風景掬すべく水亦た頗る清し故に

太白湖の名あり乾隆年間浚渫を加へ周圍四十淸里の湖水となし漢の昆明湖に倣ひ太白を改めて昆明と名けたり湖上に一島嶼あり龍神廟を祭る島嶼と湖岸に大理石の穹橋を架す穹數十七箇あり故に俗に十七孔橋と稱す湖に沿ふて孤立せる低山を萬壽山と云ふ矮松疎生し山腹に石塔あり上に宮殿あり風景絶佳なりしが現時燒失し唯だ銅製の一堂宇を存するのみ近年西太后の懿旨に依り修繕を加へつゝあるが故に外人の見物を許さゞること圓明園に同じ是れより南十四五町にして玉泉山あり山上より淸泉噴出するを以て此の名あり山上に白色大理石の石塔あり遠望甚だ佳なり此の地方は北京より最も近き山水明媚の地なるを以て歷代の皇帝遊園を設け或は寺院を建て親王大臣の別墅も多し故に詳細に見物せんには十數日を費やすも猶ほ且つ足らざるべしと雖ども先づ見物は大略に止め是れより北に向ひ蒙古街

道を進み行かば十里許にして南口の驛に達す

南口

蒙古と山西、直隷兩省との間に蜿蜒たる山脈あり峯巒屏列、自ら兩地の境界をなす此の山脈を横斷せる一峽路は即ち蒙古地方より羊毛、家畜等を北京に輸入し北支那より製茶等を露領キャクタ(賣買城)に輸出する所にして其の入口にある一小驛を南口と云ふ誠に蒙古、北支那の咽喉の地にして蒙古隊商の常に足を憩ふ所とす往昔此の地に兵營を設け以て蒙古南侵の虞に備へたり通常の支那驛は唯だ瓦牆を繞らすのみなれども南口は其の住民の他より襲撃せらるゝを防禦し併せて蒙古の支那帝國に侵入するをも防禦せんが爲め圍牆の外驛の北方に當り山に沿ふて更に瓦牆を築き牆の極まる所に望見臺を設く旅行者は此處に至り始めて支那歴史に所謂塞なるものは斯の如きものなるか

を思ひ出さん

居庸關

南口より長城に至る道程は僅かに六里に過ぎず此間の道路は溪間の峽路に過ぎざるを以て南口にて車を下り驢馬を雇ひ一日分の食物飮料を携へ且に南口を出發し夕に歸着するの心算を立べし峽路の摸樣を記さば斷崖數千仭兩側に峙ち中間に溪流あり平常は水少なく巖石流に滿つ此の溪流こそ即ち北支那より蒙古に通する唯一の道路にして霖雨霏々、溪水氾濫するときは道路忽ち變して河底となる平常水少なきときと雖ども素と溪流を遡るとなれば石を踏み巖を遶り右に屈し左に折れ仰ひて巍々たる禿山を望み俯して溪流の潺湲たるを聞き奇異の風色に端なく精神を動かされ恍惚として俯仰するの間俄然蹄響の戞々たるを聞ん是れ北京と蒙領キャクタと蒙古中西部との間に

往來する駱駝騾馬驢馬等にして其數多きには旅行者も一驚を喫すべし或人の統計に依るに一日に此の峽路を過るもの駱駝二三千頭、騾馬一千餘頭、驢馬三四百頭にして九、十、十一、の三月に通行するもの最も多しと云へり又此の峽路を經て蒙古より北京に輸入する羊の數は一年六十萬頭に達す斯の如く此の峽路を通行するもの年々頗る多きに拘はらず支那政府は嘗て之を修繕せんとしたることなかりしが七八年前政府は始めて收道牲畜捐局なるものを設け通行の動物より道錢を收めたり即ち駱駝より十文牛、馬、騾馬より五文、驢馬より三文、家猪及び羊より二文を徵收す但し婦女の乘馬乘騾と官吏の乘馬よりは之を徵收せず而して此の道錢を以て峽道修繕に着手せしも降雨毎に流失するを以て未だ道路の形をなさず峽路を登り行くと三里山益々高きを增し道愈々險を加ふ眼を上ぐれば峽路の左右に瓦牆の蜿蜒たるを見、又

其の峽路に當れるの處に一箇の洞門あるを見る是れ即ち支那歷史に有名なる居庸關なり近きて門に入れば四壁は白色大理石を以て疊み佛像を彫刻し其の下に梵語、西藏語、滿洲語、女眞語、オムイゴール及び支那語を以て經文を刻す此の關門は元朝の建築せるものにて六國の國語を以て經文を刻したるは其の意忽必烈の征服したる六外藩の人民が此の關門を過ぎて經文を讀むとあるべきを期したるに由るならんか關の近傍に足に鎖せる囚徒の南天を望みて悲哀の情を現はすは大罪の爲めに塞外に謫せられたるものなり旅客は此處に至り四面荒涼の景色を見古來歷史の關係を想はゞ詩想勃々胸裏に湧き平素如何に文學思想の乏しき人と雖ども勞せずして一篇の詩文を得ん

萬里の長城

居庸關を出で仰ぎて眼を北方に放てば遠く白色曲線の峯頭に蜿蜒す

るを見る是れ即ち世界の一偉觀たる萬里の長城にして此處より峻坂險路を登ること半里許りにして長城の關門に達す關門は八達嶺と云へる峽路の極る處にあり俗に上關と稱す蓋し山下の南口關は下關にして中腹の居庸關は中關なり長城は花崗石の切り石を疊みて築きたる牆壁にして牆上處々に敵樓あり或る洋人の測量に依るに基厚二丈五尺、頂一丈五尺高さは峯を越へ谷に跨るを以て一定せずと雖ども其の最も高き處十五六丈低きは二丈に過ぎずと云へり此地山上なりと雖ども樹木なく降雨少なく空氣常に乾燥なるが故に牆壁毫も古色を帶びず唯だ牆の矢狹間のみは瓦を以て築きたる故多少靑苔の附着するなきにあらず關門の傍に石段あり就きて牆上に登り杖に椅りて北方を長望すれば眉に似たる遠山は靄くが如く茫々たる原野は恰も海の如く行人は罌粟より小にして連續せる駱駝と馬羣とは恰かも蟻の

行列に異ならず沙漠より吹き來る徹風は自ら清烈の氣を帶び颯々として征衣を拂ひ旅客をして古來の英傑が三軍を提けて匈奴を追ひ戟を横へ蒙古を睥睨したる當時を回想せしむべし更に又眼を轉じて左視右顧すれば峻嶺高崖の頂深溪幽谷の底凸凹せる牆壁は或は高く或は低く長蛇の如くに數百里を走るを見支那歷代の皇帝が匈奴を恐れたる程を察すべきなり而して此長城は始皇の三十三年蒙恬の築きたるものなりと稱すれども今日に存するものは始帝の遺業にあらずして梁の武帝が大同六年に新築せしものなるが如し蓋し武帝の巨萬の夫を役し巨萬の財を費し此の工事を起したる一には匈奴を此處に防止するの意に出でしや疑ひなしと雖ども亦た匈奴をして此の偉觀を見て後に瞠若たらしめ之れより北に馬を牧するの念を絶しめんとするにありしならん八達嶺の長城は所謂内部の牆壁にして行くこと十

數里更に一の長城あり其の構造は前記する所と略々同一なれども稍々宏壯ならず

昌平州

長城を見了りたれば南口に歸り一泊すべきなれども時刻猶は早ければ直ちに南東に向ひ昌平州に至りて一泊すべし昌平州は明陵の入口にあり嘗て宗廟を守護する州城なりしを以て城牆城門宏大なれども朱明亡びてより絶へて修繕を加へず城内草離々として狐狸横行し唯だ中央を貫通する大街に一帶の人家あるのみ旅行者は先づ州城に入り此荒廢の跡を見ば未だ明陵に至らざるに先ちて亡明を弔するの意を起さん此の地の旅店は天津北京間の旅店と略ぼ其の構造を同すと雖ども牛馬、騾馬、驢馬を前面の廣庭に繫げる數は頗る多きを見る民家の屋根は北京近傍の如くに瓦を用ひずして人工を加へざる石盤(スレー

ト)を以て之を掩ひ配列宜しきを得ず外觀甚だ粗にして何んとなく僻陋の風あるを覺ゆ

明陵

昌平州を出で北に向ひ行くこと五六町にして一座の牌樓あり明朝の頃は陵の第二外門にして其の前邊に第一外門ありしとのことなれど現時は其の遺趾だに留めず牌樓は純白なる大理石を以て築き高さ五十尺、巾九十尺宏壯觀るべし支那には牌樓多けれど概ね木造にして琉璃瓦を以て之を葺けるもの多きに獨り此の牌樓は全部大理石にして屋根亦た然りと雖ども其の瓦の如く刻みあるを以て遠く之を望めバ通常の牌樓に異ならず柱梁一面に鳳、麟、龍蛇の精密なる彫刻あり明朝の頃は碧、赤兩色に着色せしと云へど方今は唯だ雨露の痕跡を四壁に留むるのみ牌樓を過ぎ北行數町石橋あれども修繕を加へざるが爲め

に壞廢渡る可からず明代にては此橋の前面に二株の老柏ありて頗る風致を添へ此の橋より紅門に至る三清里の間兩側に松柏各々六列を植へ列ね紅門の傍に數多の堂宇ありて陵監之に住し皇帝行幸の時は行宮に充てたりと云へど當今は全く其の形を存せず紅門を經、合歡木の林を過ぐれば龍鳳門に達す龍鳳門は即ち陵壁の入口にあるものにて今は只纔に其の基礎を存するのみ又た門の傍に龍を刻したる一對の石柱と七箇の大理石橋ありしが既に壞敗に屬して其跡を認めず門外に立ちて一望すれば近きは一里、遠きは二里、山側に沿ふて森林點在し黃色の堂宇高く其梢上に突出するを見るは是れなん明朝十三帝の墓陵にぞある十三陵とは長、景、永、德、獻、慶、茂、裕、康、泰、定、昭、思の諸陵にして中永樂帝の墓陵たる長陵は壞敗最も少なく規摸亦た宏大なれば旅行者は先づ長陵を見て其の他の諸陵を類推して可なり扨て龍鳳門の遙

趾を過ぎ猶は進み行かば更に一の牌樓を見る側に巨大なる石碑あり篆書にて大明長陵神功聖德碑と題し其の下に碑文あり背後に乾隆帝哀明陵三十韻御製の宸翰を刻す樓を過ぐれば兩側に薄藍色の大理石を刻みて造りたる數多の獸像あり即ち獅子、豺、駱駝、象、麒麟、馬各々二對宛內一對は立ち一對は座す諸像皆な巨大なれども就中象の如きは高さ一丈三尺、巾七尺長さ一丈四尺あり此の獸像に隣して明代の衣服を着せる文武官の立像左右に各々六箇あり但し此等の諸像は全石より成るものにして數多の石を組み立たるにあらず諸像の前を過ぎて行くこと雲時龍華門あり門を過ぐれば長陵の陵門に達す陵下に一簇の農家あり朱氏の遺族にして今ま猶は祖先の陵を守るものなり此の農夫に多少の錢を與へて陵門を開かしめ陵番の案內に依りて陵門に入れバ巨大なる拜殿あり間口三十五間奧行十五間八箇の圓柱四列す皆

緬甸、安南の深林より切り出したるチーク材なり此の圓柱の周圍は凡そ一丈二尺にして床より天井迄の長さ三十二尺あれば其梁に至るまでの全長は六十三四尺もあらん歟斯の如き大材を遠く外藩に徴し巨額の運搬費を惜まざりしを見れば當時明朝の隆盛推して知るべく又た是れと同時に斯くも隆盛を極めたる朱明氏が一朝變亂の起るに當り帝城守を失し其子孫をして自ら景山に縊死するの已を得ざるに至らしめたるを回想せば轉た哀弔の念に堪へざるべし堂内の床は一面に方形の瓦を敷き詰め中央に小龕を安置す龕中には成祖文皇帝と題したる位牌あり其の前に花瓶燭臺等を安置す拜殿を越へ老柏の植込を過ぎ行くこと數歩、永樂帝の墓に至れば煉瓦を以て築きたる方形の墓壇あり大さ家屋の如し其の下に皇帝の遺骸を埋む一方の斜面に穹形の入口あり此の入口より入りて其の頂上に登ることを得べし頂上に

永樂皇帝の墓碑あり厚さ三尺幅六尺高さ之に準ず碑面に成祖皇帝の墓と刻す是れ即ち北京城を築きたる英邁卓絶なる皇帝の墳墓にして往時は容易に常人の拝觀をすら許さゝりしに今は外人の縱觀に任ずるのみならず狐狸の白晝に横行するを見るあらんとは時勢の變亦驚くべきにあらずや

湯山

明陵より昌平州に歸り夫より北東に向ひて湯山に赴くべし湯山は明朝の温泉場にして山下に二小村あり大湯山、小湯山と云ふ人家各々數十戸、而して小湯山に行宮あり方今荒廢に屬すと雖ども其の規摸宏壯にして宮殿の搆造林池の布置等昔日の隆盛想ふべし、宮殿の間を過ぎ最も奥深き處に至れば十餘間四方なる二箇の湯壺あり純白なる大石にて疊み其の深さを知ること能はざれども一個は熱度高く一個は低

し此の湯壺より熱泉地下を過ぎて浴室に至る浴室も結構頗ぶる美なり浴室の後部は樹木蓊鬱として生ひ茂り林間に一大池あり白石造の小亭を設く蓋し浴後散歩の際休憩所に充てたるものならん歟又た地を隔てゝ五色の彩色を施したる樓閣あり其の構造は通常の建物と異り屈曲の數多なるは旅行者に奇異の感を與ふべし

歸路

以上に記したる所は北支那中の名勝古跡にして旅行者若し此の案内記を手にし予輩の指示したる諸地を見れば始めて北支那を知りたりと誇言することを得べし何んとなれば北京は一大帝國の首都、西山地方は有名の遺跡にして長城は世界の偉觀、支那の舊跡なり且つ此等の諸地を見ば商況風俗國情一々了知することを得べければなり日子を費す少く効驗最も多き旅行とは實に此の支那旅行に在るべし扨て湯

山を見了りたれば是れより北京に歸り再び天津に戻り芝罘を經て直ちに歸朝の途に就くか或は更に勇を皷し朝鮮又は南支那を旅行するか开は旅行者の便宜に任すべきなれど北京より山海關に出て滿洲に入り盛京、吉林の二省を越へ露境を過ぎ浦潮斯德に至り貿易の情況及び軍港の兵備等を見、歸路元山に立寄り夫れより釜山に出で玆に歸朝の途に上るも亦た利する所多かるべし

朝鮮の部

釜山及其近傍

釜山港は慶尚道の南岸にあり我對馬の竹敷を距ること僅かに五十一海里馬關を距ること百三十一海里本邦に最も近き外國開港塲にして天氣清朗風無く波穏なるの日は對馬の東端より水波漂渺の間に釜山近傍の山岳を遠望することを得べく對島の人民は勿論馬關九州地方の人民は一葉の漁舟に帆け其間を往來する程なれば我居留民頗る多く全港の商權は槪ね我商人の掌握する所なり物價は內國と同じく邦人の旅店あり料理店あり小間物見店あり唐物店あり其名は一の貿易塲なれども其實我殖民地なり故に此地に遊ふもの毫も不便を感ずることなければ別に案內を記すの必要もなく港內一二の名跡なきにあらざれども特筆の價値ある者なし旅客若し閑あらば居留民に就きて其所在

を開き一見するも可なり近傍には一二の勝地あり南の方三里半東萊府と云へる一小都會あり府使の居城にして繞らすに牆壁を以てす處々に石門を開き內外往來の要路とす牆壁は悉く花崗石を疊みて築きたるものにて宏壯見るべし傳へ云ふ城內三千の兵を養ふと而れども其實四五十人に過ぎず此一事を以ても朝鮮の兵備如何を窺ふに足る城內戶口凡そ六百、酒樓あり章臺あり商家あり毎月三回陰曆六の日を以て市を開く近郊の衆民多く城內に集り百貨を賣買す故に同府に遊ばんとするものは必ず此の市を見て風俗人情嗜好需用等を探るべきなり釜山より東萊府に赴かんとするものは距離僅少なるを以て案內者と共に徒步するも差支なけれど輿或は馬に乘するも亦た可なるべし馬賃は馬夫一人の日當を合せ僅かに韓錢二百五十文輿は輿夫三人を要するを以て七百文內外なり馬夫輿夫等は各々三尺許の烟管を携

帶するのみにて烟草を所持せざるを以て右賃錢の外に烟草代を乘客に請求するともあるべし但し其の言ふが儘に與ふるも僅に六七文に過ぎず別に濁酒代を求むれども是れ亦五六文にて充分なり輿或は馬を雇はんには旅宿に命ずるを便とす其の漫遊に就きては別に注意すべき程の事あけれども日本人の口に適すべき食物なきを以て鑵詰の用意を忘る可からず又た同府は府使の居城なるを以て濫りに外人を宿泊せしめざるが故に同府に一泊し深く韓人の情俗を探らんと欲するものは帝國領事より免狀を請ひ之れを携ふるを要す東萊を距ると一里水營と名くる處あり左水師の居城にして朝鮮の軍庫あり此の地眺望頗る佳なり東萊を過ぐること半里金山里と名くる浴湯あり我邦人は稱して蓬萊の温泉と云ふ日韓の貴紳豪商此の地に浴するもの多し今を去ること數年前釜山の居留民共同して浴場を設く本邦人は湯

番に告げ自由に入浴することを得又た宿泊することをも得べし宿泊料として別に定めはなけれど湯錢の外先づ三十錢と心得おば不足あからん此の地本邦人の往來多きを以て飲食物に差支なし金山里を距つる一里半木魚寺と稱ふる一巨刹あり外圍凡そ一里常に僧兵三百人を蓄ふ堂宇は山背にあり境內樹木蓊鬱最も納涼に適す風景我日光に髣髴たりと云ふ

釜山仁川間の航路

釜山京城間の道程は日本里數百二十九里旅客一度此間を過ぎれば畧は朝鮮の人情風俗制度を洞見し利益する所多かるべきも舟車の便なきのみか道路頗る險惡加るに山賊猛獸横行し危險云ふべからざれば海路を取り先つ仁川に赴き夫より陸路京城に上るを可とす釜山仁川間の航路は四百三十一海里四十時間にて航行するを得べし船賃は上

等金十六圓下等金四圓五十錢但し中等の設けなし

仁川及仁川京城間

滊船仁川に着するときは船宿の出で迎ふこと内地の諸港に同じ仁川は港内水淺く船舶を泊するに便ならず郵船會社の滊船の如き左迄大なるものにはあらざれども沖合遙かに投錨するを以て端艇賃は現今の如き船舶輻輳の時は五十錢以上を要すべし港内は泥土に充塡せられ海水常に黄色を帶び瘴氣時に水上に泡立て奇臭鼻を撲ち人をして嘔吐せしめんとす船宿の有名なるものは福島友吉にして福島屋と稱す旅宿を兼ぬ其の他郡、松本、淺岡等の船宿旅宿あれども共に有名ならず邦人の仁川に赴く者多くは福島屋に泊す別に大佛樓と稱する旅館あり家屋の構造料理の體裁凡てホテルに擬す宿泊料は平素福島屋に泊するも一泊下等五十錢上等七十五錢大佛樓に泊する時は三圓位な

り割烹店の有名なるものは吉松山田の二店なれども洋食を好むものは大佛樓に上るを可とす居留地内及び其の近傍に見るべきもの甚だ少なし特に土地濕潤なるが故に夏日は風土病とも稱すべき間歇熱の大に流行することあるを以て永く仁川に滯在するは宜しからず先つ居留地の模様貿易の景況等を取り調べなば速に京城に上向するの準備をなすべし京城仁川間の距離は凡そ九里馬或は輿の外旅行を便にするものなし馬は皆な日本人の所有にして朝鮮産の駒なりこれに西洋鞍を置き京城仁川間の片道の借料金二圓を通常とす之に朝鮮人の馬夫を付し道案内をなさしむれば別に五十錢を要すべし尤も京城に至るの道路は一本筋にして岐道なければ案内者なきも差支あるとなし此の場合には京城着の上馬を馬宿に引渡すべし又た輿は二人にて擔ぎ一人の手換を付け都合三人にて片道の輿代凡そ我が三圓位なれ

ども煙草代濁酒代を要するは前記載する所の如し仁川京城間の宿驛は其半途に五柳洞と名くる一小敗驛あるのみ其の他は皆な荒漠なる原野にして人家少なし旅客は此の驛に於て晝食をなすべし驛中日本人の旅店あり日本の酒飯を命ずるを得べく又望みによりてはチムレッ位の洋食をも調理せしむることを得べしビール、ブランデー等の飲料もあり以て渇を醫するに足る晝食其他五柳洞にて要する費用は一圓內外に過ぎず京城の手前凡そ一里の處に達すれば漢口の流あり幅凡そ一里水清く砂白く風景愛すべし渡船場あり麻浦(俗にサンガイと云ふ)と云ひ往昔加藤清正の涕泣せし處にして又十七年の亂には竹添公使等一行の苦戰せし所なり韓人之を官渡と稱す所謂官設渡船場にして規則上渡船料を要せざる筈なれども渡錢として韓錢百文位を與へざれは口實を設けて旅客を拒絕することあり麻浦の渡を過ぎ行くてと

少許にして京城に達す所謂漢城なり洋人之をSeoulと云ふ順路南大門より入り日本人の居留地なる泥峴(韓語チンコーカイ)に向て一直に進行すべし城門より此所まで路程僅に十町許

京城内日本人在留地

南大門を入れば直ちに我居留地に達す該居留地は釜山仁川等の開港場と異なり朝鮮政府が清韓條約を以て支那人に京城内雜居を許可せしより日韓兩國間に締結せる均霑條約の結果として本邦人の多く京城内に雜居せしものゝ去る十七年の變亂以降自衞の爲め集りて居留地の形勢をなせしものなり故に眞正の居留地にあらす唯だ居留地と通稱するのみ中に泥峴、鑄字洞、羅洞の三街あり戸數三百餘人口八百以上旅店の有名なるもの三あり松本、精養軒、林松亭是れなり宿泊料ハ平常一泊下等二十五錢中等五十錢上等七十錢にして此等の旅店は割烹

をも兼業す物價は平素我邦に二倍すと雖牛豚鷄肉及ひ鷄卵は我邦よりも安し即ち鷄卵一個五厘乃至八厘牛肉及ひ豚肉は一斤七錢乃至九錢鷄一羽十七八錢に過ぎず兩替をなさんには多額なるときは第一銀行の出張所に就きて之れを爲すべしと雖少額なるときは孰れの商店にても之れを爲し得べし又た夏日は氷店割合に多く其價も亦た頗る廉なり斯く氷の廉にして多きは漢江の側なる揚花鎭に國王所用の氷庫六箇あり夏期之れを大闕に運搬するの際邦人竊かに安價にて官吏より買受くるに由る帝國領事館は鑄字洞に公使館は南山の半腹にあり又た泥峴に官民共同倶樂部あり本邦人遊戲の場とす商店の重なるもの五あり宮田商店、濱田商店、和田商店、佐竹店店、向山店店と云ふ其他數多の商店あれども共に有名ならず邦人の輸入する貨物は重に陶器唐木綿(朝鮮にて金巾と云ふ)金巾(朝鮮人は寒冷紗と云ふ)等にして朝鮮

人の我商人に賣込むものは沙金棒銀等なり先年は貿易先づ盛大なりしと雖十六七年以降朝鮮の人心に痛く邦人を擯斥するの感情熾んなるに至りしと資本の豐富ならざるとに依り京城の商權は概ね支那人の掌中に落ち邦人は常に支那人の後に瞠若たるの有樣あり當時支那人の京城に在留するもの三千人餘の多きに及び大資本を携へ來り盛んに日本人と競爭するのみならず又た朝鮮内商と拮抗するに至りしを以て朝鮮人中心あるものは竊かに大に之れを憂ひ邦人は支那人の擧動意外に活潑にして資本の饒多なるに喫驚し居れり又た此の居留人は總代を互撰し總代役所を設け教育衛生其の他百般の公共事務を司らしめ領事に差出すべき諸願屆書の如きも該役所より進達せしめ所謂る自治制度を行へり人口僅かに八百人餘の小天地に行へる自治制の如き素より識者の參考となすべきもののなかるべしと雖も別に一

定の法律なく而かも其制度の圓滑に行はるゝは大に原因あるに由るものなるべし漫遊者之れを研究せば少く裨益する所あらん

京城

先づ居留地の狀況を探り了りたれば案内者を伴ひ京城内の模樣を見るべし今ま旅客の便宜の爲め以下に其大畧を記さん京城の幅員は東西南北各々一里繞らすに墻壁を以てす高さ二丈周圍七里と稱す戸數五萬餘人口二十萬東及び南に正門ありて東大門南大門と稱す各三層の高樓にして宏壯人目を驚かすに足る外に七門あれども正門にあらざるを以て壯觀東南大門に及ばず鐘路と云へる地に人譽(大鐘)あり大は我が三井寺の大鐘よりも大なり毎日午前三時及び午後七時之を鳴し諸門開閉の合圖となす故に仁川より京城に登らんとするものは遲くとも午後七時南大門に着するの手順をなさゞるべからず南大門よ

り東大門を貫く大路を鐘路と云ふ支那及び朝鮮の豪商は皆此の街に住す道路の廣さ五十間餘家屋の構造甚だ粗なるを以て市街美麗ならず又た道路の中央に多く露店を出すと北京の如く夏日は異臭鼻を撲ち稀に往來するものは殆んど其の臭に耐へざらんとす街路は凡て廣豁なり是れ朴泳孝氏が去る明治十七年道路制を發布し果斷と勇氣とを以て京民の苦情を顧みず道路を打ち廣げしに由るなり然れども方今は路店街路に市をなし兩側僅かに數間を剩すに過ぎざるを以て道路制は最早空文となりしを知るべし京城は流石一國の首都丈ありて見るべきもの少からず旅客の先第一に見るべき物又見んと欲す所の者は國王の宮殿なるべく殿名は大闕と稱し京城の北部にあり明治十七年以前は方今舊大闕と稱する景佑宮を以て國王の居となせしが同年戰亂以來不祥なりとし新大闕に遷宮し南門を以て正門とし東西二

門を副門とし繞らすに堅牢なる牆壁を以てす闕内の仁政殿は即ち國王の執政の所にして南正門より仁政殿に至るの間三門あり守衛儼然として之を守る大闕は通常人特に外人の漫に入るを許さず故に之に入らんとするものは公使謁見の際從者に扮し共に入るを便なりとすれども他に又た一法あり大工左官等より通門切符を借り受け職工に扮裝して入闕すべし通門切符あれば闕内何處なりとも自由自在に散歩觀覧することを得るなり舊大闕は公使の紹介さへあれば何人たりとも縦覧を許可す十七年の變亂後少しも修繕を加へざるを以て悉く舊時の觀を存し我兵の戰ひたる所清兵の仆れたる所歴々見るべし旅客大闕を見了りたれば城内の勝地古跡を探るべきなり我邦人の先一見せざるべからざるは塔洞の五百羅漢とす塔の高三十間許四面に五百羅漢の佛像を彫刻す精巧驚くに足る傳へ云ふ此の彫刻物は唐の

憲宗の時支那より渡來せるものなりと未だ眞僞を知らず塔の頂上二間許地上に落つ其の故を朝鮮人に問へば加藤清正之れを毀ちたりと答ふ又た南山の麓に清正の城跡あり當時政府の所屬地にて倭城臺と稱す眺望絶佳なり倭城臺に近く有司の別墅あり閔泳煥氏の福泉菴鄭範朝氏の花水亭丁奉賀氏の紅葉亭最も顯はる共に幽邃閑雅にして避暑に適す家屋の構造風流を極め庭園も亦た別趣あり韓錢一貫文計りを留守番に與ふれば縱覽を許し又た喫茶位は爲すことを得べし校洞に大院君の居あり雲峴宮と稱し當我公使館の前面に當れり内部は縱覽を許さゞれば外圍丈なりと見物すべし又た京城は蕎麥を名物とす市街何處にても之を鬻ぐと雖ども水表橋の側なる蕎麥屋は其の名京城に高し就きて一椀を味ふも可なり

城外の勝地

已に京城内を見了りし後は城外近傍の勝地を探るべし京城は恰も我京都の如く匝らすに山岳を以てし其の間勝景に富まざるにはあらざれども外客に取りて曳杖の價値あるもの甚だ少なく旅客の一見せざるべからざるものは僅かに四五あるのみ今ま之れを記さんに京城の周圍に四箇の城壘あり東南にあるを南漢山或は廣州と稱し西にあるを松都と云ひ西南にあるを江華島と稱し北にあるを北漢山と云ふ古來壯兵を以て守衞せしものなれども當今は唯だ番兵を置くのみ南漢山は京城を去ること四里餘東大門を出て直路之れに達す明の崇禎八年(今を去る二百五十六年)太宗兵を率ゐて朝鮮を撃ち京城を陷るゝや國王李倧京城を棄て出でゝ之を據守したることあり此の地躑躅花を以て名あり又た納涼に適す文人騷客の杖を曳くもの常に絶えず北漢山は京城を去ること三里紅葉を以て顯はる大闕よりは山路直に赴

くことを得べく南漢山と同じく國王の避難所となす松都は京城を去る五里江華島は十二里二城共に京城守衛の城壘とす旅行者は此の四城を見ば啻に絶佳なる風景を掬し得べきのみならず又た京城防禦の如何を知るに足らん外に彰義門の傍大闕の後に大院君の別墅あり幽邃閑雅最も藤花に名あり又た避暑に適す家屋の構造頗る風致に富む旅行者に取りて一見の價値あるものなり平壌は後來開港場ともなるべきの地なれば此處に歩を轉するも商業家政治家に取りては徒勞にあらざるべし京城との距離凡そ五十五里輿に乘るときは六日を費し費用は往復にて十五圓内外と心得なば大なる不足はなからん

雜件一二

以上記載せし道筋にては大抵日本旅店に宿泊する都合なれども或は韓人の旅宿に泊するの必要なきを保せず韓人の旅店は通常の家屋と

同じく石を疊みて床となし之れに泥土を上塗し氈を布きて踑踞する例にて床下には烟孔を穿ち一方にて火を焚けば烟は對壁の下に出で室内に充滿す蚊帳の備なければ此烟を以て蚊を拂ひ戸帳を鎖して寢に就くこと故其苦熱一方ならず又氈毛醤油砂糖の類を携ふるにあらざれば起臥飲食に不便を感すること多し韓語の旅客に必要なるは云ふまでもなけれど到る處適當の案内者に乏しからざれば數字其他極めて僅少の言語にて事足れりといふ左に之を記さん

一 ハナ　二 ツー　三 セー　四 デー　五 タツ
六 ヤク　七 イルコフ　八 ヤタル　九 アホ　十 ヨル
十一 ヨルハナ　十二 ヨルツー　以下倣之　二十 ツーヨル　三十 セーセル
以下倣之　百 ピヤク　千 チエン　文 トン　一文 ハナトン
二文 ツートン　五文 タツトン　十文 ヨートン　馬 バ　輿 コシ

舟 ツン　何程なるや ウル　日本 ニルポン　何處なりやオーテ

旅店 チビ　京城 ソール　仁川 ジンシヤン　京城内日本居留地 チンコーカイ

オイ〳〵(人を呼ぶ聲)ヤー　モシ〳〵(同)ヨボ　公使館電信局郵便局領事館等の語は日本語にて通ず

諸港間の里程

区間	里程	区間	里程
馬關釜山	百二十二海里	長崎釜山	百六十二海里
長崎嚴原	八十九海里	嚴原釜山	六十六海里
竹敷釜山	五十一海里	仁川釜山	四百三十一海里
馬關芝罘	六百〇八海里	長崎芝罘	五百六十六海里
釜山芝罘	五百四十海里	仁川芝罘	二百七十二海里
仁川白河々口	四百六十三海里	仁川平壤	二百廿三海里
馬關元山	三百八十八海里	釜山元山	三百〇七海里

長崎元山　四百六十海里

仁川山海關　三百九十三海里

仁川全洲　三百五十六海里

仁川上海　四百九十三海里

仁川大連灣　二百九十海里

附錄

朝鮮問題の由來

杉山虎雄著

憐むべし朝鮮王國や其地勢を見れば長く東南に突出し日本海支那海を界し我九州と相對して一大海峽をなし西は山東直隷に臨み吉林盛京と境し北は壤を露領西伯利亞に接し東洋諸强國の間に夾まり氣候温暖土地肥沃人口二千萬を容るゝに足る若し夫れ之に十九世紀の文明を注入し盛に殖產の業を起し旁ら兵備の充實を謀り巧慧敏活の外交家ありて奮つて國交場裏に出で諸强國と折衝せば豈啻王國を泰山の安に置き蒼生をして鼓腹の樂を享けしむるのみならんや其得る所擧て數ふべからざるものあらん然るに建國以來五百有餘年の久しき未曾て國運振作の大業を企てしとあらず祖宗の遺烈は年を逐ふて消

磨し王室の威嚴亦將に地を拂はんとし外戚政を擅にし王族其專橫を制すると能はず憤懣の心內に屈して怨嗟の念絕ふるの時なし有司百僚は權威に戀々とし國家百歳の長計を忘れ苞苴公行善惡顚倒し士心解體して進取の氣象に乏しく民力疲弊して殖產の業興らず上下皐つて一日の安を偸み其國の盛衰を見ると恰も楚人が秦人の肥瘦に於けるが如く恬として其天賦の好地位に立つを知らず袁世凱嘗て國王に書を奉りて曰く朝鮮如破舟、木已毀、蓬已零落、必易木換蓬、以可求其固と蓋し肯綮を得たる者に近からん乎

朝鮮の天賦の好地位に立つ斯の如く國力微弱亦斯の如し他年一日東洋に雄飛し亞細亞の覇權を掌握せんと欲する强國の之に垂涎する豈敢て怪むに足らんや是に於てか朝鮮問題なる者起る請ふ吾人をして其由來する所を敘せしめよ

清韓兩國が始めて交通を開きしは遠く夏殷の昔にあり當時の事邈として尋ねべからざるのみならず朝鮮問題に毫末の關係あきを以て此處には先づ王祖李氏建國以來兩國の地位及關係を論究するを以て足れりとせん

朝鮮王祖李氏の高麗王を廢して自立せしは今を去ること五百餘年の昔に在り當時の事蹟を記するもの乏しきを以て其眞相を知ること能はずと雖建國の後直ちに使を朱明に遣はし藩邦たらんことを請ひたるより見れば當時新國の基礎未だ固からず朱明の保護に依りて纔かに王位を全ふしたるものゝ如し其後我豐太閤の朝鮮を征伐するに當りても朝鮮は朱明の援兵を籍り辛して我大軍を却けたることあるは世人の洽く知る所にして朝鮮の朱明より享受したる恩澤は少々ならざりしなり故に歷代の朝鮮王は何れも朱明に對して協和親睦の意を

表し朱明も亦其小弱にして自立し難きを憐み誘導保護の道を盡したるものに似たり明韓の關係斯の如くなりしかば清の皇祖愛親覺羅奴爾哈の滿洲に崛起して朱明と兵を構ふるに當りてや時の朝鮮王李倧は朱明の爲めに愛氏に抗抵したりき愛氏大に之を怨みて朝鮮を亡さんとするの念を起し明の天啓七年兵を擧げて朝鮮を伐ち城下の盟をなさしめ春秋歳幣を貢せしむることを約せしも朝鮮王の愛氏に心服の色なく動もすれば進貢の約を破り加之朱明を援助せんとしたるより數年を經て再び朝鮮に臨み降伏の約を締結せしめたり是より朝鮮は大に愛氏を恐怖し其逆鱗に觸れ第三の征伐を招かざらんとに孜々として只管恭順の意を表し愛氏遂に朱明を滅ぼし今の大清を建つるに及んでは其正朔を奉じ嗣位の命を請ひ且つ其進貢を怠らざりき是れ清國に朝鮮を以て屬國なりとの辭柄を設けしめたる原由なりとす」

清國は二百有餘年間朝鮮より恭順の意を表するを以て滿足し明治の初年朝鮮に佛國との交渉起り佛國が清國政府に向ひて要償の談判を試みし當時清國は朝鮮の屬國にあらざるとを公言し其要求を拒絕し我國に征韓論の湧起せし當時も亦副島伯に對し同一の公言をなせしに拘らず宇內の大勢一變し東洋の諸國鎖港攘夷の舊說を捨て歐洲各國と交渉を開きてより東洋は方さに是れ各國の戰場と化し去り桃源の夢常に暖かならず外交互市の俗界漸く多事ならんとするに當り朝鮮は適々東洋問題の燒點となり各國之に垂涎するの色を示せしかば茲に始めて嘗て朝鮮を降伏せしめたることあるを回想し屬國の實を明にし各國の覬覦を絕ち併せて自國の勢力を強大ならしめんとするの念を發したる折柄明治十五年大院君一派の事大黨と閔族との軋轢より一大事變を生じたるに乘じ吳長慶丁汝昌袁世凱等をして大院君

を清國に拘致し且つ呉長慶をして道路に「朝鮮は中國藩服の邦たり」云々の公示をなさしめたり當時韓廷の有司は自國々權の侵蝕せられたるを知らず心竊かに政敵たる大院君の拘致せられたるを賀し清國を德とし其屬邦と認めたるを看過したり次て十七年の變起るや駐韓清兵の總督として京城に駐在せし袁世凱は事大黨を助け開化黨を斃し益々其驥足を伸ぶるに便ならしめんとし王宮に對し又た我公使に對し發砲したることあるも清國は之を咎めず又た伊藤、李兩伯の締結したる天津條約には事實調査の上變亂の際我國人を殺傷したる兵士を處罰すべしとの條項あれども清國は之れを空文とせり蓋し條約に從ひ處罰を行はんとせば先づ袁を嚴罰に處せざるべからざればなり清國は啻だ袁を咎めざるのみならず袁の處置を是認し一兵官より擧げて朝鮮總理交渉通商事宜に任じたり

袁世凱が總理交涉通商事宜に任せられ京城に駐紮せし以來行ひ來れる政略は一言以て之を蓋ふことを得曰く其の手段の善惡を問はず一に朝鮮をして清國に隷屬の實を表せしめんとするにあり袁の新官職を帶びて入韓するや時恰かも韓露慶興貿易章程の談判中なりしかば袁は先づ其談判に干涉し朝鮮の談判委員を威迫し種々の故障を夾み締結を妨害せんと試みたれども露公使ウェーバーの機敏なる早くも袁の妨害を覺知し之を防遏するの術を廻らしたれば袁の政略は遂に水泡に歸したりと雖一年有餘の間露韓兩國委員をして爲す所なく空しく俎豆の間に相見しめたるは實に袁の政略の然らしめたる所なり是れを袁が威嚇手段を行ひたるの第一着步とす之れに次で種々の威嚇を以て內治外交に干涉を加へ韓廷の自由を撿束すること甚はだしかりければ韓廷は清國を恐怖すると同時に之れを嫌惡するの念を發し

袁を見ること蛇蝎の如くにして只管其の干渉を杜絶せんと欲せしが國力微弱にして士に義勇の心なく民に憂國の情なければ復た如何ともすること能はざりしと雖其淸國を嫌惡するの念は蒸々焉として夏雲の結ぶが如く淸韓の關係を絶たんとするの狀は拘々焉として羈絆の馬に似たり露公使ウヱーバーは機乘ずべしとて袁の威赫手段に反し任俠の狀を粧ふて巧に韓廷を籠絡したれば窮鳥何んぞ懷に入らざらん朝鮮は露の庇護を得て袁の干渉を排却せんと欲し即ち兩國同盟の密約を締結せんとしたり袁の政略是に至りて一跌したりと雖ども袁も亦た一箇の好外交家たるを失はず韓廷に告ぐるに淸國の赫怒せること及び海陸問罪の師を派せんとする旨を以てし得意の威赫手段を行ひ韓廷を戰慄せしめ國王及ウヱーバーより密約の虛傳なることを證明せしめ局を平穩に結びたり是れよりして韓廷に於ける露國の

勢力は稍々衰退の色を示し袁の勢力旭日東天の觀を呈せしにぞ袁は百尺竿頭一歩を進めて韓廷より露國の勢力を一掃し之れに代ふるに淸國崇拜主義を以てし屬邦の實を固からしめんとて即ち現國王を廢し王甥を立て之を掌中の玉となし自ら韓廷を左右せんと計畫したり事當時の國王顧問官兼外衙門總務局長米人デンニーの著述に係る淸韓論(China and Corea)と題する一小冊子に詳なれば左に其一節を抄出せん、

淸國公使ノ行爲中其最モ惡ムベキハ陰カニ國王ヲ廢シテ之ヲ淸國ニ携ヘ去リ其頤使ニ隨フ孱弱者ノ世トナサントシテ企テタルノ一事ニアリ此事實ハ昨年(明治二十年)七月中に發覺シタリ淸公使ノ兇惡無道ナル行爲ハ爰ニ至リテ極マレリト云フベシ(中略)此惡逆ナル陰謀ハ國王之ヲ探知シタルモ若シ彼ノ賢明ニシテ誠忠ナル臣民閔泳翊

氏アルニアラズンバ其謀遂ニ成リタルナラン氏ハ國王ノ認許ヲ經テ陰謀ニ與シ忠實ニモ時々袁公使ノ一擧一動ヲ國王及余ニ報告シ以テ余輩ヲシテ遂ニ此陰謀ニ克ツコトヲ得セシメタリ(中略)抑々此計畫ノ大略ハ左ノ如シ

先ヅ外夷防禦ノ準備ヲ名トシ土兵ヲ江華島ニ練リ其士卒ヲシテ事變ニ際シ指令官タル清公使ヲ容易ク認識セシムル爲メ同公使自ラ之レニ臨ミテ檢閱シ又該兵ハ大闕ノ近傍便宜ノ位置ニ屯營セシメ而シテ火ヲ大院君ノ宮殿ニ放チ火燄ヲ信號トシテ王妃及其黨派ニ反對セル大院君ノ黨派起リ放火ヲ以テ國王ノ所爲ナリトナシ急ニ王闕ヲ圍ム此時袁氏ハ一千八百八十四年(明治十七年)ノ例ニ倣ヒ鎭撫ヲ名トシ前記ノ兵卒ヲ率ヒテ國王ヲ虜ニシ之ヲ闕外ニ出シ國王ノ兄ノ子ヲ立テヽ世子トナシ大院君ヲ擧ゲテ攝

政タラシメ斯ノ如クニシテ遂ニ朝鮮ヲ占領セン

而シテ支那公使ハ此企圖ニ要スル費用ノ計畫ヲ解ラズ已ニ某將軍ニ三千兩ヲ交付シ是ヲ以テ軍隊ノ操練及移轉ノ費用ニ充テシメタリ然レドモ此金額ハ閔泳翊既ニ去リ逆謀全ク失敗シタルノ後清使署ニ返付サレタリ云々

デンニーの清韓論は露國の爲めにする所ありとの非難なきにあらず隨て其の事實の眞僞を疑ふものありと雖デンニーは俠氣に富める米人あり朝鮮問題に利害の關係少なき第三者の地位に立てる米人なり而して李伯の推薦に依り朝鮮國王の顧問官に任せられたるものにして其位置より云へば寧ろ清國の利益を謀るべきものなるに却て清國の朝鮮を束縛するを切齒し慷慨悲憤其身の危きを忘れ口を極めて清國及び袁を痛撃し復た餘蘊なきもの豈に朝鮮をして獨立不羈の一邦

國ならしめんとする一片義俠心に發したる者にあらざらんや
袁世凱は廢王事件に失敗し事の世上に詳知せらるゝと共に大に人望を失ひたれども素と袁は威赫手段を施すもの其人望を失ひたるも外交政略上に重大の障礙を招くことなく却て之を以て威赫を助くるの具となせしは猶は我維新以前の犯罪人が黥の多きを示して良民を恐迫したるが如く李伯と心を合せ平壤開港に異議を容れ公使を歐洲に派遣するを妨遏し服制改良に干渉したるのみならず明治二十一年六月中京城に喧傳せし夫の小兒を誘拐し其眼を抉りて藥劑となすものありとの訞說も清韓論に依れば袁の自ら搆造流布したるものにして袁は之を以て京城を亂し變に乘して一計畫を廻らさんとしたるものゝ如くに察せらる
果して然らば袁の政略は殆んど外交政略の範圍を奔逸したるものに

して之を外交政略と云はんより寧ろ叛逆の陰謀と云ふを至當とす袁は實に國事犯人の魁首にして清國公使館は國事犯人の密會所と云ふも可なり而して朝鮮政府復た之を如何ともすること能はず哀しむべき哉

國際公法に依るも普通の道理に考るも凡そ一國の公使たる者駐在國に於て逆謀を企て或は之を幇助したるときは駐在國より追逐せらるも之を拒むことを得ざるは勿論なり假令ひ未だ逆謀を企て或は之を幇助するに至らざるも駐在國に人望を失ひ國際公法に所謂 Persona Grata たるを失ふときは駐在國は本國に對して公使の召還を請求するの權あり況んや逆謀を企て駐在國を危ふせんとするものをや故に袁世凱の如きは朝鮮政府之を追逐するも固より不可なく、其召還を請求するも亦可なり不幸にして朝鮮の微弱なる此等斷乎たる處置を行はんと

は夢にだも見ざる所なるべけれど清國たるもの適々朝鮮の微弱たるに乘じ袁の擧動を看過するは國際的正理の許さゞる所なり然るに清國が啻に之を看過するのみならず却て幇助指揮する如き觀あるは何ぞや清國の有力者にして袁の政略を是認し袁を指揮する者あるに由るは言を俟たず其人を誰とかなす東洋の豪傑を以て稱せらるゝ文華殿大學士直隸總督北洋通商大臣民部尙書兼都察院右都御使直隸等處管地方兼管河道軍務粮餉刑密要等關管巡撫事一等伯爵李鴻章即ち是なり

李鴻章は素と清國の外務大臣にあらず清國の外務省たる總理衙門の顧問として勢力却て衙門を凌ぎ其言ふ所行れざるなく其爲す所成らざるはなく陰然外交の重任を一身に負ふの實あり清韓近年の關係は李の自ら作りたるものにして其袁を駐韓公使に擧げ傍若無人の策略

を行はさしめたるも亦實に李の方寸に出づ李は袁の運動を以て足れりとせず韓廷に顧問官を薦め以て内より袁を助けしめんとしたり明治十四五年の頃韓廷に於ける日本の勢力强盛にして既に牛馬、井上、高橋等朝鮮政府の顧問となり盛んに開化主義を輸入し清國崇拜主義者即ち事大黨を壓倒するの傾向あるを見自ら韓廷に顧問官を推薦し之をして内部より事大主義を發揚せしむるの必要なるを覺り日本顧問官の歸國するに乘じ獨逸人モルレンドルフを薦めて顧問たらしめたり然れどもモルレンドルフは赴任の後露國公使ウエーバーに結び清國の利益を計圖せずして却て露國を助け暗に李の政略を妨害せんとするの風説ありしより李は其目的の沮錯したるを見て言を設けモルレンドルフを天津に呼び還し其再び朝鮮を謀らんとすることあるを慮り仍ち之を水師學堂の教諭に任じ更に米人デンニーを以て顧問官

に任せしめたり當時デンニーと李鴻章との間に如何なる內約ありしやは素より知ること能はざれどもデンニーの自ら云ふ所に依れば顧問官に傭聘せられしは朝鮮の平和と秩序を維持するに盡力し且つ其繁盛を謀らんが爲めたりと是れ果して李かデンニーを韓廷に薦めたる理由なりや否やは疑なきにあらずと雖ともデンニーは入韓後朝鮮の形勢を熟察し韓廷の內狀を探究し淸國政略の此國の平和繁盛と相容れざるものなるを覺知しモルレンドルフと同しく淸國に反對の擧動をなし特に袁の廢王事件を企てたる時の如き袁と正反對の地位に立ち專ら之れが防遏に盡力し其發覺の後自ら天津に赴き李鴻章に面晤して袁が逆謀の證左を擧け之を召還せんことを請求したるも李は其請を容れず答へて曰く廢王事件は余之を詳悉す袁其中にありと雖罪責閔泳翊にあり閔氏此隱謀を企て袁を誘て之に入らしめたるなり

袁の愚昧にして此の如き陰謀に誘引せられたるに就きては業に已に嚴責したりと盖し此時に於て李はデンニーの朝鮮政府顧問官として清國に利あらざるを覺りしならんデンニーも亦李の政畧の眞相を穿ち得て其朝鮮の獨立と相容れざるを覺りしならん仍ちデンニーは夫の有名なる清韓論を著し清國の政略及び袁世凱を痛撃したり是に於て李の顧問官政略再び敗る李が外人を顧問に推薦したるは表面公平無私を粧ひ裏面清國の利益を盡さしめんとするにあれども其再度の失敗を招きたるは誠に怪むに足らず假令ひ顧問官たるべき外人と如何なる密約を結ぶも一國政府の顧問官たる重任を負ひ其內治外交の衝に當るに際しては輕佻浮薄の徒と雖情として其國を賣るに忍びざるなり況んや學識あり意見あり輿論の制裁を重んずるの外人に於てをや李の政略の屢ゝ敗れたるもの復た故なきにあらざるなり李はデ

ソニーに失敗せし後又之を召還し更に橫濱駐在米國領事グレートハウスを聘し顧問官となしたるが其赴任の後如何なる擧動をなせしか未だ詳ならすと雖惟ふに同國人たる前顧問を辱しむることなかるべし李の屢々敗れて猶其政略を改めざるは吾人其深意の存する所を明知するに困むと雖日本或は露國より顧問官を入れざらしむるか爲めなりとせば蓋し大過なからん乎

李は又朝鮮政府の大收入たる關稅を左右せんと欲し各港の稅關には清國の總稅務司なる英人ロバート、ホールの採用したる英人を雇はしめ之を以て朝鮮の稅務司としホールをして之を監督せしむ故に稅關は其名朝鮮政府の有なりと雖其實清國政府の有に異ならず現に稅關報告は清國の報告の附錄として公行せらる清國が屢〻朝鮮政府の財政切迫するに當り之を救ふに吝ならざる者實に之か爲めのみ

更に飜つて淸國と利害相反する露國が朝鮮に對して行ひ來りし政略を見るに露國は大に東洋に志を得んが爲め一千八百四十一年夫の有名なるムラウヰヨフ將軍を東西伯利亞總督に任し是れと同時にプーチャヤナムを以て北京公使に任し總督は兵力を以て公使は機智を以て內外相應し淸國に迫り爲す所あらんとせしも未其志を得す會々千八百五十九年即ち咸豐十年淸國と英佛との和親破れ同盟軍の北塘に上陸し進んで天津を拔き八里橋に勝ち破竹の勢を以て北京を犯さんとするに際しプーチャヤナムは得意の機智を奮ひ英佛淸の葛藤を調停し淸廷が大に公使を德とするに乘ト所謂北京條約なるものを締結し一丸を放たす一兵を動かさす烏蘇利江より圖們江に至る一帶の地方を得露國の版圖は淸國の北背を一匝し其東端は垂れて壤を朝鮮に接するに至り浦潮斯德は此新版圖內に開創せられたり浦潮斯德の開創は

實に一千八百七十二年にあり露國は之を以て東洋の一大鎭となし他國戰艦就中英艦の東洋に跋扈するものを抑制し旁ら東洋の商權を掌握せんとしたるも八十五年阿富汗斯坦に事ある英國が早くも巨文島を占領し露艦を日本國に封鎖せんとしたるより浦潮斯德の未以て其東洋政略を貫徹するに十分ならざるを覺り玆に露國の政略は一轉朝鮮に注きたるもの丶如し

露國が朝鮮と通商條約を締結せしは一千八百八十四年にして翌八十五年其互換を行ひ今の全權公使ウヱーバー代理公使として京城に駐紮せり是れ露國か韓廷に勢威を占むるに至りたる端緒にして爾來ウヱーバーは巧みに縉紳を籠絡し露國崇拜の念を韓廷に注入し隱然大院君一派の淸國崇拜主義に拮抗せしめたり是より先き阿富汗斯坦事件に關し露英の和親將さに破れんとし英艦巨文島を占領し露艦をし

て嚢中の鼠たらしめんとしたることあれば露國は茲に再び英國をして日韓海峽中の島嶼を占領せしめざらしめんが爲め及び東洋の一大鎭と頼みたる浦鹽斯德は不幸にして嚴冬凍氷の爲め船艦の出入すること能はざるを以て支那海に近き朝鮮沿岸に凍氷の害なき一良港を得んことを欲するの念慮を起したるものゝ如し此時に當り淸國は韓廷に於ける露國の勢力の日に月に增長するを見て袁世凱を京城に派し内治外交に干渉せしめたればウェーバーは却て之を利用し淸國を嫌惡するの念を增長せしめ百尺竿頭一歩を進め朝鮮を露國の保護國たらしめ以て冬時不凍の一港を求むるの慾望を達せんとしたりとは當時外交社會に喧傳したる風説にして世之を露韓同盟事件と稱すアゝ露公使の權謀策略何ぞ夫れ斯くの如く巧みなるや袁が露韓の親密を破らんとするの政略を利し却て之を逆用し其親密を温めんとす所

謂敵の刄を以て敵を殺すもの外交家の手腕は凡て斯の如くならざる可らざるなり然りと雖ウェーバーの政畧は不幸にも袁が韓廷を恐喝し妨害を加へたる爲め其目的を果すに至らざりしも當時袁の之を妨害することなかりしならんには朝鮮は既に露國の保護國となり或は其屬國となり露國は現今東洋の最強國となり淸を捕へ英を挫き延ひて我國人をして肝膽を寒からしむるに至りしやも未知るべからず露國は同盟事件に失敗したりと雖一千八百八十八年慶興貿易章程なる者を締結せり該條約たる朝鮮に不利にして露國に利益なるは勿論各國に比類なき特權を露國に與へ且つ其文字曖昧を極むるが故に一朝露國の政略に激變を來すことあらば露國は自由に之を以て葛藤の種子となすことを得べく要するに該條約は一轉せば朝鮮否寧ろ東洋の亂階たるを免れざるものなり葢し斯の如き條約を締結したるも畢竟露

國が韓廷に勢力を占むるが故に外ならざるなり
露國は斯の如く韓廷に勢力を有し而して未其素志を達するに至らずと雖吾人は露國對韓政略の導火日一日に其の爆發の逼り來るべきを知る其導火とは何ぞ西伯利亞大鐵道の落成是なり
西伯利亞大鐵道と對韓政畧との關係を論せんには先づ此大鐵道の效用は軍事上にあるか商略上にあるか又た殖產上にあるかを講究せざるべからず而して露國の此大鐵道を敷設せんとする目的は決して一に止まらざるべしと雖ども吾人は敢て其目的を問はず唯だ其効用の如何を講究せんと欲するのみ西伯利亞の形勢を案するに面積四百八十餘萬方哩にありと雖人口僅に四百四十萬沃野千里に亘り鑛屬夥多ありと稱するも內地未だ完全の測量だに了へず唯だ大陸を横斷する旅行者が馬上に雜草の蔓々たるを見峰巒の巍々たるを望み種々なる想像

を畫き種々なる風評を傳ふるに過ぎざれば西伯利亞に富源の存するあるや否やは未だ詳ならず隨て此大鐵道が殖產上の効用を奏するや否やも亦た未だ知るべからざるあり更に商略上に就きて考ふるも既に加那陀太平洋鐵道の全通ありニカラガワ運河の開鑿も亦た將さに近からんとし東洋貿易の交通線は益々其多きを加へんとして海運の便は鐵道の利を壓倒することあるより見れば此の鐵道の商略上の効用素より皆無と稱するを得ざるも亦た意外に少なかるべきは疑を容れず唯だ夫れ軍事上に於て莫大の効用あるべきのみ故に吾人は此大鐵道を目するに軍事鐵道を以てせざるを得ず果して然らば其竣成と共に露國の東洋に於ける兵勢は大に增加せられざるを得ず何となれば露國は此鐵道を利用し二旬日を出でずして首都より幾十萬の貔貅を太平洋岸に派遣することと敢て難しとせざればなり況んや慓悍

の名ある夫の哈薩克の屯兵を派遣せんには僅かに旬餘を要するのみなるに於てをや露國既に東洋に於て兵勢大に加はらば其向ふ所如何清か英か韓か又た日本か從來の歷史に徵するに露國は短刀直入輸贏を一戰に决するの快を好まず先づ根據を固ふし大に兵勢を豫め勝算の數を定め然る後徐々驥足を伸ふるの方略を執るべければ清英日の諸國は爲めに直接の影響を蒙らざるべし特に我に對しては現今覬覦の念あらざるのみならず我歡心を得て倶に共に大事を成さんとするの觀なきにあらざるもの丶如くなれば我國が大鐵道の竣功より受くる所の痛痒は微少なりと雖唯だ夫れ朝鮮は露國が東洋に雄飛するの段楷たるを以て吾人は轉ゝ此小弱國の爲めに憂慮に堪へざる者あるなり然りと雖吾人は露國か直ちに兵力を以て鷄林を蹂躙し呑噬の慾を逞ふせんとするものなるを認めず露國の政略の狡猾なる容易

に兵を動かすを好まず蓋し兵力を以て一國を滅ぼすは國民をして永く露國に忠順ならしむるの道にあらざるを知ればなり然れども弱肉强食の外交界に於ては無形の勢力は常に有形の兵力に伴ふ兵力强ければ勢力必ず大なり稀れに兵力を藉らずして勢力を有するものあるも其永久なると難し今日の外交界には三寸の舌と五尺の銃とを要す露國既に朝鮮に對して巧舌を弄し盡したり今ま又た鋭銃を得ば其勢力前日に幾倍すべきや疑を容れず更に又た商利上より考察するも西伯利は未だ測量をも了へずと雖此鐵道の落成より自然遺利を收拾するを得るに至るべく又た東洋より露國に輸入する貨物は皆此鐵道を經過すべきを以て西伯利亞の咽喉たる浦潮斯德は次第に繁盛を極め其狹隘を感ずると同時に又冬期凍氷の不便を感ずること大なるべし此點より見るも露國が不凍港を得るの念を愈々切ならしむべきを知

る吾人が大鐵道を以て對韓政略の導火となすは則此故あればなり
然れとも嘗て露國政府の半官報と稱せらる丶ノーブエ、ウレミヤ新聞が政府部内有力者の間に行はる丶意見なりと稱し掲載せる所に依れば露國は他國にして朝鮮に異圖を狹むことなくんば朝鮮を併呑せざるべし露國政略の要は朝鮮をして獨立の體面を保持せしめ以て露國の鎖鑰たらしむるにあり然れども若し他國にして朝鮮の獨立を危ふせんとすることあれば露國は決して之を看過せざるべしと是れ果して露國の政略ならんには吾人は東洋の爲め太白を傾けさるを得す其眞僞は惟に今回の事件に於ける露國公使の擧動に於て見ることを得ん』
吾人は又聊か英國の政略をも述べざるべからず英國の政事家チャーレス、ヂルクは其著歐洲政略の現状に於て英露對戰の方略を論して曰く我は先づ中央亞細亞の方面に於て印度を防禦するの備をなし淸國を

說きて露に敵せしめ且つ浦潮斯德の方面より進んで大に露領を攻擊するの方畧を取らざるべからずと是れ唯だヂルッ一家の私言にあらず英國はヂルッの言を俟たずして業に既に此方畧を執り一千八百八十五年亞汗富斯坦境界事件に就き英露の和親將さに破れんとするに際して時の總理大臣グラットストンは先つ朝鮮の一島巨文島を占領し之を以て根據となし露艦を日本海に蹙め進んで浦潮斯德を攻擊せんと試たり然れども淸國は朝鮮を以て屬邦と認むるが故に其朝鮮の一島を占領せられたるは恰も自國の版圖を掠奪せられたるが如きの感を爲し英國政府に向て占領撤回を照會したり英政府は始め露國との關係切迫せしを以て淸國の感情如何を顧みるに遑あらず事此に及びたりと雖中央亞細亞問題の稍々平穩に就くや淸國の感情を復舊せしめんとて淸國をして他國に朝鮮の版圖を占領せしめざるべしとの擔

保をなさしめ喜んで之を放還したりヂルッ之を評して曰く世界の他の方面に於て勝を露に制するの目算なきに巨文島を放棄したるは狂愚と云ふの外なしと是れ或は然らん然れども爾來英清兩國の交誼は日に月に親密を加へ兩國間に陰然一箇の默約の成立する如き觀を呈するに至りしより見れば英國はヂルッの云へる如く世界の他の方面に於て全く勝算の數を失ひたるものにあらす英清同盟の風說は外交社會に諠しきにあらすや

此時に至る迄巨文島の占領の外英國は朝鮮に對して別に爲す所なかりしが清國と同盟の萌芽を生育せしめん爲め清國の朝鮮に對する口實を是認し自ら朝鮮に干渉することをなさす清國を放任若しくは補佐して手を朝鮮に下さしめ露國が朝鮮に志を得んとせば英國は先づ清國を煽動して之れを妨害し間接に其利を享くるの政畧を執るもの

ヽ如し

斯の如く英國は清國の爲め直接朝鮮問題に當るの勞を免れ坐して其利を享受すと雖清國も亦英國が勞せずして其利を享受するを咎めず適々英國の後援あるを利とするものヽ如し故に英國の對韓政略は直接に朝鮮問題に關係なきも其清國の屬邦主義を是認し朝鮮に於ける清國の勢力を益々強盛ならしむるの一點に於て大に注目せざるべからざるものあるなり況んや同盟の萌芽益々發達し一朝事あるに臨みては清國を援助することあらんに於てをや

英露を除くの外歐米各國中朝鮮に利害の關係を有するものなし唯だ米國の朝鮮をして獨立の地位に立たしめんとするあるのみなれども是れ實に米國固有の任俠に出づるものにして米國より見れば朝鮮が孰れの邦國に隷屬するに至るも殆んど痛痒を感ずる所なきなり故に

米國の朝鮮に對する感情は英露清等諸國に比して自然冷淡なるべきは亦免るべからざることなれども米國も亦一大國なり其朝鮮を獨立せしめんと欲するは朝鮮の爲めに利益決して少々ならざるべし

今や朝鮮と清露英等諸國との關係を叙し了りたれば我國との關係を論せざるべからず往古の事固より問ふの要なし維新以後我國が朝鮮に對する歷史を案ずるに明治元年宗對馬守に命して遣韓使を派せし以來我邦の對韓政略は實に五大段落を經たるものなるを見る維新の當初より明治四五年頃迄ハ朝鮮と互市を通ずるを以て結局の目的とし屢々大使を派遣したるも彼れ未だ我維新の大革命を知らず國書の德川幕府より出でずして中に皇勅云々の文字あるを見て若し之を受領せば日本に臣事するに至るべしと妄信し種々の口實を設けて大使を拒絶し國書を排却し時に驕慢不遜の擧動をなしたるも我政府は之

を容るし之を忍び更に咎むる所なく速に通商條約を締結するを以て唯一の目的とし再三大使を派遣したり是れを我國の修好的政略とす是より先き時の攝政大院君は佛米二國の軍艦を走らせしことあるより忽ち自國の兵力如何をも顧みず洋夷恐るゝに足らず況んや日本をやとの妄想を起し我邦が修好的政略を行ふを見て之を蔑如するの念を生ト我大使を冷遇し剰さへ無禮を加ふること一層甚しきに至りたれば我政略は一變して問罪的政畧となり明治六年十月廟議遂に征韓論を議決するに及びたるが岩倉、木戸、大久保等諸氏の反對の爲め前議を飜し征韓の議全く止みぬ蓋し大院君にして久しく政を攝せしならんには我國は彼の輕侮を招き通商條約の締結或は容易に望むべからざるに陷りしならんが幸なる哉現國王李熙氏政を親するに至り朝鮮の政略俄に變じて修好講盟の利を覺り七年十月謝するに多年大使を

拒み國書を却けしは韓廷の意にあらざる旨を以てし始めて條約締結の端緒を開きたり然るに八年中我が雲揚艦砲撃の事ありて再び征韓の議起れり蓋し問罪主義の依然として未全く消滅せざるに由るもの乎我政府は大に決する所あり黒田井上の兩氏を以て正副大使とし國書排却の事を合せ我軍艦を砲撃せしを難詰す韓廷戰慄罪を謝し我請求に應ト修好條規を締結したり當時當局者が征韓論を實行せざりしは我國人中之を千歳の遺憾となすもの多し其の論に曰く當時は露韓の關係なく清韓の交渉未著しからず一擧して八道を征服し今日に至るまで朝鮮を我國の屬邦たらしめたらんには我國は日本海及び北部支那海を占領し北に露國を抑へ南に清國を制すること易々たりしならん惜ひ哉機既に去ると言一理あるが如しと雖熟々當時の朝鮮を見るに猶我國の安政前後に於けるが如く外國の形勢に通曉せず鎖攘の

主義を頑守し我國を以つて夷狄視したるなり實に之を伐つこと甚だ易く之を覆へすこと掌を反すが如くありしならん然れども貧弱頑冥の小弱國を征服して一時の快を貪るは豈に啻帝國の名を辱かしむるのみならんや當時帝國の內政未整はず國力疲弊して外に用ゆるの餘力なし若し強て之を征服したりしあらんには紛擾錯亂困難百出して或は今日の國運を見ること能はざりしやも知るべからず當局者の飽くまで平和手段を執りたるは寔に時宜に適したるものならん而して此平和手段なるものは將來に如何なる結果を生じたるかを見るに我對韓政略の第三段落たる誘導政略となり韓廷に於ける我勢力は旭日東天の勢をなし干戈を動かさずして征韓論者の夢想したりし所の大半を達するを得たりしなり

征韓論一敗地に塗れ西鄉後藤板垣等諸氏の草莽に隱遁するや我政略

は茲に漸く一定して再び平和主義となり一進して誘導政略となり彼をして文明の眞味を知らしめんことを謀り韓廷に勸告し列國を紹介し朝鮮をして始めて國交場裏に出てしめ郵便の制を敎へ洋式の操練を傳へ新聞發行を學ばしめ我國に留學生を派遣せしめ其他朝鮮をして開明の境域に進ましめんとするものは努めて之を幇助したれば韓廷内の先覺者は大に我國を德とし我幇助を藉り我保護の下に立國の基礎を固ふし文明の恩澤に浴せんとし所謂日本黨なるものを樹立したり事情斯の如くなれば我國の韓廷に於ける勢力は遙に他國の右に出でたり實に我國か京城に接近し朝鮮の要港たる仁川を開きて互市場となさしめたる主唱者たりし一事を以て見るも我國の勢力の一斑を推知するに足る不幸にも我勢力の強大なりしは忽ち大院君一派守舊黨の怨恨を招き十五年の變となり我公使は京城より追逐せられ非

日本黨の領袖たる大院君自ら攝政となり大に守舊黨の氣燄を吐き日本黨なるものは概ね殺戮せられ我國の勢力は大に減少したりと雖和議成り竹添公使の赴任するに及びてや猶日本黨の殘存するものあり我國の力に依りて竊かに國政を一新せんと企てたれば忽ち十七年の變を起し我國の勢力は更に減少したり其後十八年伊藤伯は全權大使として淸國に赴き所謂天津條約なるものを締結し變亂の局を告げたるが爾來我政略は全く放任退守の一方に傾き勉めて朝鮮と特別の關係を絕ち已むを得ざるものゝ外敢て交涉を試みず纔かに條約を維持するを以て結局の目的とせるものゝ如し

然るに顧みて宇內の大勢を察するに各國が特に重を朝鮮問題に置き大に警戒する所あるに至りしは實に十八年以後にして從來朝鮮に關係を有せざりし邦國の猶は且つ欹耳張目するに反して獨り我國が放

任退守の政略を採るに至りしもの大に理由の存するものなくんばあらず

疾風の勢を以て進むものも盤根錯節に接すれば動もすれば頓挫せんとす我國は朝鮮に對し世界に卒先して誘導開發の政畧を取り來りしも一たび明治十五年の變亂に遇ひ再たび十七年の凶變に會し我同胞は屍を異域に暴らし我公使は僅かに身を以て免れ朝鮮の我同主義者は過半虐殺せられ同時に日韓清三國の葛藤を生じたり加之若し更に依然誘導開發の政畧を取て一歩も退くなからん乎三び紛爭を生じ葛藤を釀すべきの恐れあるのみならず朝鮮在留の我同胞の生命財産の安全を計り我公使の万全を期せんには兵士若しくは巡査を派遣せざるべからず其煩累決して少々にあらざるなり若し困難に遭遇して挫折するは常人の免れ難きものとすれば再度の變亂は我が對韓政畧上

に大なる影響ありしや知るべきのみ

内に事あれば外を顧みるに遑あらず明治十七年は議會開會を去ること六年にして漸く第二の維新、開闢以來の大政變に近きたれば人心内に忙はしくして外に疎ならざるを得ず當局者は憲法及び諸般の法律を制定するに鞅掌し民間に於ては政黨の組織遊說に熱中し眼中對議會準備ありて外交あるを忘れたり次で憲法の發布は國民をして狂喜せしめ議員撰擧は全國を擧て狂瀾怒濤の中に投じ議會の開會は黨派競爭政權爭奪の熱度を高め復外を顧るに遑なからしめたり十七年以後我國民の朝鮮を忘れたるも亦豈偶然ならんや

天津條約は我國民に安堵の念を與へ朝鮮に向かへる我人心を弛めしめたる意味なきにあらざるも亦知るべからず天津條約の要點は日淸兩國より派遣したる屯兵を撤し爾後軍事敎練の爲め兩國より敎官を

派せず又將來事變ありて兩國の一より兵を朝鮮に出ださんとするに當りては互に行文知照すべしと云ふに在り左れば此條約は之れを直接にしては清國をして叨りに兵を朝鮮に弄して威赫を行ふを得ざらしめ之を間接にしては朝鮮の清の屬邦にあらざるを自認せしめたるものにして他年一日朝鮮問題の切迫するに及んでは之を裁斷するの好材料たるべしと雖唯其れ清國をして叨りに兵を朝鮮に弄することを得ざらしめたり故に我國民をして暗々裡に朝鮮の事左まで憂ふるに足らず天津條約のあるありとの感想を起さしめたることとなきを保せざるなり

且又日本が朝鮮に對して誘導開發の政畧を取り孜々として怠らざりし所以のものは朝鮮をして富强なる一獨立國たらしめ以て東洋の一鎭臺となし以て東洋の平和を保持せんとの好意に出でたるや明かな

り然れども朝鮮人の過半は日本を以て異圖あるものと誤信し親切の忠告も却て野心より出でたるにあらざるかを疑ひ猜忌百端疑心暗鬼遂に變亂を生ずるに至りしなり若し日本にして强て誘導開發の政畧を繼續せん乎朝鮮の人心は益々猜疑し愈々動搖して如何なる變亂を續發するやも知るべからざるのみならず結局は淸國と開戰せざるべからざるの止むべからざるに至りしや知るべきのみ若し開戰の準備既に整へりとせば飽まで前政畧を持續するも亦或は可なるべしと雖當時の國勢は未斯の如き進歩をなすに至らざりしなり然らば一たび鋒を收めて朝鮮人心の沈靜を待つは亦時に取て止むを得ざるの政畧なりしならん

我國が放任退守の政畧を執りし者果して以上の理由なりとせば其理由の消滅したるときは再び誘導開誘の政畧に復せざるべからざるは

素より言を俟たず凡そ已むを得ざるの政畧は又已むを得ざるの結果を生す明治十八年以後朝鮮は一方に任俠懇切の誘導者を失ひたると同時に陰險邪智に富める勸告者否威嚇者の爲に誘惑せられ國運の開發せざると依然として舊の如くなるのみならず却て次々漸々退歩せんとするの有樣ありて守舊黨たる閔族は益々擅横を極め奸臣君側に跋扈し暴吏八道に跳梁し政綱日に弛み民心愈々叛き外交修らず内治壞廢し先には防穀事件あり今は東學黨の亂起り我との條約を無視し我居留民を危からしむるに至る而して宇内の大勢は吾人をして愈々朝鮮を等閑視するを許さず吾人は今や百難を排し事に臨むの決心をなさゞるを得ざるなり而して清國の爲す所を見るに我國の放任政畧を執るに乘じ益々傍若無人の擧動をなし天津條約に於て獨立國たるを自認しながら爾後依然東藩と稱し屬國と唱へ朝鮮の自主權を害し

自國の私利を謀らんとす現に牙山に上陸したる清兵總督聶の如き清國が屬邦朝鮮を愛撫する爲め兵を出したりとの諭告を發するに至る是に於てか任俠義氣に富める我國民は內治上の紛爭を忘れ上下協心清國の干涉を絕ちて朝鮮を純然獨立の一邦國たらしめんとを望む國力亦長足の進步をなし海に巨船堅艦の浮ふあり陸に幾万の武夫脾肉の嘆を懷くあり而して國庫に一千餘百万の餘剩金あり一大活劇を東洋の天地に演出し世人の耳目を新にし國威を宇內に輝かすの時は今日を措て復他あらんや今回出兵の趣旨一には居留民を保護するに出てたると勿論なりと雖蓋し又此意なきにあらざるべし吾人は切に我政府の此際に處するの政畧宜しきを得袁の所謂木を易へ蓬を換へ以て其國基を固ふし內に文明を注入し外に他强國の干涉を絕ち東亞の海洋に一獨立國を建設し毅然として國交場裏に立たしめ我國と共に

永く平和の恩澤に浴せしめんとを希望す記し終るの時清國主戰論を容れ李總督兵を天津に集むるの飛報に接す

北支那朝鮮探驗案內 終

定價金貳拾錢

明治二十七年七月十五日印刷
明治二十七年七月十八日發行

版權所有

著者　波多野承五郎
赤坂區氷川町十二番地

仝　杉山虎雄
芝區愛宕下町二丁目三番地

發行者　林平次郎
日本橋區通三丁目六番地

印刷者　杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目二番地杉原活版所主

大賣捌所

名	所
松村九兵衛	東京市京橋區南傳馬町一丁目
吉岡平助	同二丁目
三木佐助	同日本橋區通一丁目
柳原喜兵衛	同二丁目
梅原龜七	同三丁目
川瀬代助	同三丁目
片野東四郎	神田區表神保町
長崎次郎	同裏神保町
吉田幸兵衛	同表神保町
勝見儀助	同一ツ橋通町
水琴堂書店	日本橋區本石町
柳正堂書店	同區通油町
丸善書店	同區濵花町
川又銀藏	京橋區銀座四丁目
金港堂支店	同區尾張町
目黒十郎	小石川區大門町

所	名
大阪心齋橋筋南一丁目	吉川半七
同備後町四丁目	目黒支店
同北久寶寺町	大倉書店
同北久太郎町	小林新兵衛
同備後町四丁目	丸善書店
尾州名古屋本町	金櫻堂
同玉屋町	中西屋書店
熊本市新二丁目	富山房書店
薩州鹿兒島仲町	東京堂書店
靜岡市新通一丁目	有斐閣書店
信州松本本町	上田屋書店
甲府市柳町	水野書店
横濱市辨天通二丁目	小林喜右衛門
常陸國水戸上市泉町	博聞社
仙臺市國分町	東海堂
越後長岡町	青山清吉